
東方稲子神

アポリオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方稲子神

【Nコード】

N8030Y

【作者名】

アポリオン

【あらすじ】

どうもアポリオンです。メインの「とある死神の娯楽遊戯」が行き詰ったので、気晴らしにちまちま更新していきます。いわゆる東方の短編集です。

そつだ、牛乳を飲もう その1（前書き）

内容には全く関係ありませんが、最近この二人が愛し合ってれば世界が少しは平和になるんじゃないかって気さえしています。

そうだ、牛乳を飲もう その1

がりがりがりがりがりがり……

「ムラサ、ストップ」

縁側で足をぶらつかせながら噛むことおおよそ30分。かじっていたら肉まで届きそうだった。

私はイライラすると爪を噛む癖がある。爪を切る必要がないくらいに噛む。

もう何年ちゃんと切っていないか分からない。おかげで先っぽはいつもガタガタ。でもそのうち自然と削れて丸っぽくなってくから困らない。

だけどイライラしてなくても無意識に噛む癖がある。だからホントにいつもガタガタ。

「これダメだって……私が切り揃えたげる」

「いや、別に困ってないからいいわよ」

ぐいと手を掴まれ引き寄せられる。顔近い、顔近い。

「だあめ。私が許さない。女の子なんだから指先にも気い使っとこよ」

「そういうのとか、あんま興味ないし」

「だあーめ。ムラサがよくても私がいくくない。可愛くしたげるって」

余計なお世話だ。私は海に生きた女。そして今は聖と仏に仕える身だからそういうのはいらぬ。

私自身、もともと興味ない。男を誘惑するための飾り付けなんて私はいらないのだ。余分なことはしたくない。まっすぐに、清く正しく、まじめに生きていけばいい。

「何でそんなことするのよ」

「ん？ 好きだから」

いつつもそうだ。私にちよっかいかけてばかり。世話焼き。おせっかい。

何で？ って尋ねればいつも決まって「好きだから」。悪戯の免罪符みたいと言わないで欲しい。

仏頂面だったりニヤケ顔だったり。そんな軽々しく挨拶みたいと言葉じゃないんじゃない？ 知らないけど。

何考えてんだか。まったくもって正体不明。いや意味不明。

私は好きって感情なんて分かんないからいつも困る。困惑して、戸惑って、面倒になって考えるのをやめる。

ヤツは可愛らしいピンクの小さな爪切りを持ってきた。ほら、手出してと催促されて反射的に手を差し出す。

エスコートでもするみたいに恭しく握られて手のひらにキスされる。髪の毛が当たってこそばゆい。

「私のこと、ちゃんと見てくれますように」

「今こうやって見てるじゃない……」

「それは違うよムラサあ」

手首のあたりをざりざりと舐めてきたので叩いて躡けた。

まったく舌が動物なら行動まで動物なんだから。だったら叩いて躡

ないと。

「そういう悪戯はいいから。そんなんするなら私、席立つわよ?」

「いや、ダメダメ。そんな手してたら自分引つ掻いちゃうでしょ?」

「引つ掻かない!」

「腕のどこ、かさぶた作ってるのに? ほうら、大人しく切られち

やえばいいのよ!」

ぱちん、ぱちん。と白い半月が飛んでいく。噛み切れず残った部分が綺麗に丸く切り取られてく。

あれってどこに行っちゃうんだろっね。目で追ってても分かんない。見失う。あ、床に落ちた。これ踏むと足痛そう。

鼻歌まじりに手際よく切っていくコイツが恨めしい。しかも無駄に上手いから余計腹立つ。

鼻歌に合わせて羽が動くからそれを眺めて目玉をきよきよる。ぐるんと一回転。

何でこんなヤツに好きに爪切らしてんだろっ。この手をぴっと引つ張って逃げたらいいじゃない。

いや、違うよ。逃げる必要なんてない、ただ帰るだけでしょ。自分の部屋戻って後片付けの続きとか。

台所でおゆはんの支度とか、庭先の洗濯物取り込んだりとか。やることはいつくらかでもあるんだし。私だってヒマじゃないし。

離して、離してよ、離せよ、この……

「ぬえー!!」

「ん?」

「……早くして、じゃないとまた噛んじゃう」

「ん、了解であります船長!」

こういうときだけ調子乗らないで欲しい。なーに笑ってんだか。爪の断面をやすりでしゃこしゃこ削られる。白い粉がいつぱい飛ぶ。いけないお薬みたい。

指の腹でいっこずつ触って削れたか確認してる。早くしてよ。イライラするんだから。

足の指を閉じたり開いたりしたり、擦り合わせたりして居心地の悪さを紛らわす。

上を向いて、天井の木目を数えてやりすごす。私は何にイライラしてるんだろう？

たぶん私にしてる。というか何でか分からないことに分かんなくて、分かんないからイライラしてる。

……自分の分かんない考察が一番分かんない。

聖とかの前ならこんなことならないのに。じゃあコイツのせいね。決めた。私なんかの相手してるヒマ妖怪にイライラしてる。

「ムラサの爪って綺麗…ほら、まっすぐにピンと伸びてて歪みが無い。表面も削ったらこんなにピカピカになったよ！」

「うえ？」

「いいなー惚れ惚れしちゃう。じゃあ反対もね。これ終わったらマニキュア塗ろうねー」

「い、いやだっ！」

そんなの……かじれなくなっちゃっ……！

「ふふん」

コイツの真つ黒いマニキュアを塗った指が私を掴んで離さない。

じったばったと暴れても余裕の表情でぱっちゃん、ぱっちゃん。妖怪ってこんなに力強いんだ。

にひひと笑う口から覗く牙を何とかへし折ってやりたいと思つて、作戦を練ろうと思つて、大人しくした方が得だと思つて、だから静かにした。

私の爪がなくなつていくんだからコイツの牙もなくなつてもいいはず。また生えてくるんだし、いいでしょう？

表面を目の細かいやすりを使い、至極楽しそうに削っている。粉を払うためにふーって息を吹いて最後に手で払われた。

表面を触つては満足そうに笑つてる。真っ黒いマニキュアと、真っ黒い服、真っ黒い髪。いやだ。

「……黒はいやだからね」

「そんなに私のこと嫌い？」

「……………」

「じゃあ、好き？」

「まさか！」

私に分かるはずがない感情を、よりによってコイツになんて。

「じゃあさ、これ塗ろう。透明でラメ入りで可愛いよ。あんまり派手じゃないしこれならムラサもそんなに抵抗なくできるんじゃないかな」

だつて塗るの初めてでしょう。つてクスクス笑つてる。馬鹿にされた。きらきら光る小瓶を揺すつて、羽が楽しげに躍っている。

分かった、やつぱり嫌いだ！ だつてだつてこんなにもイライラする。嫌いよ！ 似合うなんてお世辞言つても騙されないからね。

「黒なんて、嫌いだあ……………」

マニキュアは、つんとアルコールの臭いがする。あんまりお酒好きじゃないからこの臭いも好きじゃない。

いや、あのお酒は好きんだけどあんまり強くないから、つまりまあお酒は好きじゃない。とも言える。かもしれない。という負け惜しみ。

「サクツと塗ってよね。貴重な時間なんだから」

「私たちにとって時間なんてあるようで無いものでしょう？」

「違うわよ、ちゃんと人としての感覚は忘れちゃダメだって聖言ってるじゃない。私含めてアンタ以外、みんな規則正しく生活してるわ」

「私は好きなことしかしたくないから、みんなと時間合わせてないんですー。あと夜行性なので」

そんなの言い訳にしていいいわけない。

夜行性っていうなら星やナズだって本来そうだろうに。一輪だって雲山だって妖怪なんだからほんとに夜が得意なんだ。

それを何十年、何百年という歳月をかけて修正してきた。コイツにだってできるはず。

なのに自らの意志で不規則な生活をしてるなら論外。もう勝手にしてくれ。

聖が優しいのは知ってるし良いことだけど、何でこんなへんちくりんを一緒に住まわしてるんだろ。

こんなのだったらよくその辺をふらふらしてる傘の子の方がいいんじゃないの？

「アンタなんでこの寺いんのよ」

「だから、ムラサが好きだから」

これしか言えないの？ 悪戯がバレたときの言い訳ってたくさん考

えないのかしら。
ぐるんぐるん脳みそが混乱してる。コイツと喋ると疲れる。そうして
る間にもせつせかマニキュアが塗られていく。
私の爪が今までにないくらいに、キラキラって輝いていた。あかぎ
れ、まめ、切り傷、擦り傷なんか常だった手に似つかわしくない
爪。
さっきまで噛んでたなんて信じられないくらいにキラキラでピカピ
カだった。

……なんだかちよつぱり、こついつのも悪くないかもね。

「ささくれもいっばいだね……これ自分で剥いてるでしょ？」

「だって噛むと皮膚はがれるし。それ邪魔だし。イライラするし」

「もつと自分大切にしなよ」

「どうせ死なないからいいのよ」

もう死んでるし。幽霊だし。なのに妖怪だし。というか爪とかささ
くれくらいで如何にもなんないし。
腕ぶつちぎれても時間経ったら治るんだから。私たちはそういう存
在でしょう？

「私が嫌だから。やめて」

「なにそれ……勝手にすぎる」

「はいはい、何とでも言っておきな。塗れたから10分くらい
動かさないでね」

ぼふつと私の胸に飛び込んで言った。

最後の方はもごもご言っておあんまり聞き取れなかった。え？ な
にしてるの？

「柔らかい。あつたかい。ぱふぱふ、ぱふぱふ」

「ねえ……今度、風呂入るときは気をつけなさい。知ってるかしら。生物はたつた洗面器一杯の水だけでも溺れることができるのよ?」

「それは怖いね」

そのあとも爪が乾くまでの約10分。コイツは私にしがみついていた。だから最後に一発叩いておいた。

躰はちゃんとしないと。というか、ほんとに沈めてやろうかしら。

そのあと台所におゆはんを作りに行った。

先に一輪がいたから申し訳ないなって思いながら手伝ったけど、何だかいつもと違ってやりにくかった。

変わっていかないといえは変わってないけど、気になって仕方ない。手をわきわきと動かして、意味もないのに陽に透かしてみた。ガタガタの部分はきれいさっぱり無くなっていて、かわりにピカピカの指先があつた。

爪が短くなつて困ることがある。袋を開けるのがやりにくい。気になつてしょうがない。

なによりもかじれない。一度かじつてみたが妙に苦くてやめてしまった。

でも。写経をするとき、筆を握つても痛くない。皮膚をぼりぼり掻いても血が出ない。頭洗うのが下手な私は爪を地肌を立てて洗うが今日は?

「痛くない……」

イライラしたから、これからはアイツのおゆはんには嫌いな野菜をたっぷり入れてやることにする。ざまみろ。

そつだ、牛乳を飲もう その1（後書き）

最初はメインでも活躍中のぬえとそのカップリング相手のムラサのおはなし。

そつだ、牛乳を飲もう その2

命蓮寺の朝は早い。

日の出と共に起床。冷たい水で顔を洗って、湯を沸かして。朝のお勤めの準備。あくびを噛み殺して今日もがんばる。

ほうら、こうしてる間に本堂にみんなが集まってくる。ぴっしり衣服を整えた聖とそれにぴったりくつつくみたいにして来る一輪。

髪が跳ねている星は尻尾を隠し忘れていて歩きたんびにゆらゆら揺れて、ご主人の髪を直そうと甲斐甲斐しくびよこびよこ飛ぶナズーリンに当たりまくっていた。

ああ、もちろんアイツはいない。どうせ今頃お腹出して寝てるに違いない。

「みなさん、おはようございます。今日も新しい日を迎えることができました。感謝しましょう。そしてまた一日、安らかに過ごすごとができますように」

はいっ！！

朝の澄んだ空気に凜と響く聖の声で、挨拶で、今日も一日がはじまるのだ。

大体2時間くらいのお勤めを終えてやっと朝食にありつく。

酸っぱいもずくがおいしかった。疲れがとれる。よく浸かってるதாகあんでご飯3杯は余裕。

つやつや白飯って噛めば噛むほど甘くなってお腹もいっぱいになる。だから口を閉じてしっかり咀嚼。1、2、3……ごっくん。

シヤケの塩加減がいいあんばい。小骨はペツてした。でも皮は食べる。身と皮の間に、絶妙なうまみが詰まってる。

お味噌汁のわかめと豆腐があっさりで、味噌のコクがたまらない。あつたかくてお腹に優しい。ぬくたまる。

黄色のふわふわ卵焼きが最高。今日はだし巻き卵だったから、明日は甘い卵焼きだ。明日も楽しみ。

早起きでお勤めして、今日もメシがうまい。ごちそうさまでした。幸せ補充、完了。

「ねえー。一輪てさ、何で聖好きなの？」

「急にどうしたのよ？」

かちやかちやと食器をぶつけながら二人でお片付け。

他のみんなは次の行程に進んでる。私はこれが終わったらアイツを起こすだけの簡単なお仕事。

アイツもみんなと一緒にご飯食べたらいいのに。温め直したらあんまりおいしくないのね。

一人分だけ残った食器とおかずをちよいと寂寥感。と同時に片付けが進まないということに物憂い。

「その好きは、どんな『好き』なの？」

「お付き合いしたい方向での好き、かしら」

答える間も手を休めることなくせっせかお片付け。洗い上げた皿の水気を切って拭いていく。

流しも綺麗に洗って、でた生ゴミを袋に入れてぎゅっとしぼる。…

…やっぱり、爪が気になってしょうがない。

「付き合ってなにをするの？ 今もほとんど一緒にいるのに」

「一緒にいたいし、手繋ぎたいし、キスもハグも、あわよくばそれ以上も……」

「契るの？」

ザーツと流れる水音が気になったけど蛇口が一輪の奥にあったから、能力を使って流れを止めた。

一応、頑張れば水を操ることもできる。うん、こうすれば一輪の聲がよく聞こえる。

「そう、ね……肉には逆らえないから」

「戒律は？ 経典には禁欲って書いてあるわ」

「姐さんは中道を推してる。快樂も禁欲もほどほどに、真ん中を、つてね。言い方は悪いけどその方がいずれは檀家が増えるわ」

「女同士だなんて非生産的……」

「それがどうも、この世界じゃ必ずしも非生産的じゃないみたいで。はははは！ 不思議な世界よねえ」

珍しく大口を開けて笑う彼女に、呆気にとられる。ぽかんと間抜け面だったのだろうか。おでこを突かれてしまった。

たしかに、恋仲だと言われている少女達をたくさん目にする。寄り添って、幸せそうな姿をよく見る。

それらを私には関係のないことだと思って、見ていた。

「心があるから。愛してるって思うから、私は姐さんが好きでたまらないのよ。今でも十分だけど」

「一輪てば妖怪なのに人間みたい」

「ムラサもいずれ分かるわ」

くすくす笑う一輪には、馬鹿にされたって思わなかった。どうしてだか、アイツにだけはいつもイライラする。疲れちゃう。

とにかく分かったことは、人間も妖怪も案外違わないのかもしれない、ということ。

どっちも複雑で面倒な感情を持った生き物なのね。

『あなたにこの船を与えましょう。あなたは私のために働くのです』
誰かに必要とされるのは何て嬉しいことなんだろう。自分の怨みひとつで現世に留まって、恐れられ、妖怪となった私には縁がなかった。

恋も愛も知る前に死んでしまった。それを聖に救われて。この人についていこうと思った。私の希望だった。

こんな私を赦して必要としてくれた。だから恩義に報いるために今日も今日とて、

「ぬえー、いい加減に起きなさい。ご飯冷めちゃうわよ！ もう冷めてるけどー！」

コイツの布団をひっぺがすのです。

「あー……おはよ、ムラサあ」

「さっさと起きる。私はアンタの母親じゃないのよ」

「キスしてくれたら起きる」

「意味分かんない。訳分かんない」

起こそうと引つ張ったら、逆にコイツに引つ張れて布団に突っ伏してしまった。

獣臭い布団。ぎゅっとしがみつかれて、羽も使って拘束された。私

のイライラは一気に募り、さつきまでの幸せがチャラになる。

「ムラサあ、好きだよー」

「聞き飽きたわ。つまんない」

「本当だつてば。キスして、ね、ね」

「キスは『すき』な人としかしません。ほら起きる、馬鹿ぬえ！」

文字通り、叩き起こす。これがお遊び終了の合図で、それ以降はちやんと起きる。

毎朝このやりとりをするのは少し疲れるけど、仕事として捉えるならばかなり簡単な部類。

あとは朝食を整えてやって、その間に掃除と洗濯。食べた頃合を見計らって後片付けをしてから昼食の準備にとりかかる。

だいたい毎日同じパターン。今日はおうどん湯がいて釜玉にしよう。つるつると喉を通る湯で加減にすればいい。

薬味はしょうが、みょうが、ねぎを刻んでおこう。付け合わせはささ身とチーズを海苔でくるんで揚げればいいかな。ナズが喜ぶに違いない。

「私行くわよ」

「待ってムラサ、すぐ着替えるから」

コイツはいつも、やけに私と一緒に行動したがる。普段はふらふらと遊びまわってるのに私を見つけるとべったりくっついて離れたがらない。

まるで聖と一輪みたい。泣きじゃくる子供みたいで鬱陶しいというのが本音だったり。だけど、それが嫌じゃなかったり。

……あれ？ まさかね。

「明日は早く起きようかなあ……」

後片付けに訪れた食卓にて、ぼつりつぶやくアイツが麦茶を注ぎながら話しかけてくる。

「どうして？」

「だって明日は甘い卵焼きでしょ？」

「そう、ね……アンタもたまにはみんなと一緒に食べたらいいわ。片付け2回しなくて済むし」

一人で食べるご飯なんて美味しくないだろうに。頬についた米粒をとってやりながらそんなことを考える。

大人しくしてれば可愛いのにね。ぎゅむぎゅむと頭を揉んでみた。

「……ムラサ？ 何してるの？ 痛い」

「あー、カタチのいい頭だなあと」

「どうせなら頭撫でて欲しいなーって思ってみたり」

「いやよ」

「んーじゃあ爪塗って欲しい」

「マニキュア落としたの？」

「だって黒いの嫌って言うてたからさ」

にひひと笑う口の、真っ白い牙が今日は可愛く思えた。

「これ終わったら庭の手入れ手伝いなさいよね」

「分かったって」

二人向き合って、猫背になりながらマニキュア塗り。爪が見えやすいように顔を近づける。

私より小さな手に、長く整えられた爪が並んで何だか嫉妬でも伸びる前に噛んじやう私には無理だからという無いのもねだりであって、これは決してコイツが羨ましいとかじゃないのだ。

「ハケを縦に動かしてね。一方向しかダメだよ」

渡された目に毒々しく、鮮やかすぎる色の小瓶が、魔女から差し出された毒瓶みたいってメルヘンな思考に陥ってぐるんぐるん。

これの蓋を開けたらどうにかなっちゃんじゃなかるうか。イライラ爆発とか？

ハケに液を含ませて、爪に乗せる。そのまま縦に動かせばスツときれいに伸びる。塗ってくたんびに、真紅に色づく。

唇、舌、コイツの瞳。全部が赤。目に悪い、心に悪い。頭の中につまでも残ってふとした時にコイツの笑顔ごと鮮明に思い出しそう。

「ムラサはさ、私の気持ち、受け取ってくれないの？」

「……なにが」

「好きなんだってば」

「意味分かんない」

「それは『好き』って意味が？ 私がムラサのこと好きってことが？」

ハケを動かして赤を重ねる。二回塗った方が発色がいいって教えられたから。

「本気だよ、私」

「……動かないで。塗るの初めてではみ出ちゃいそうだから」

「何が不満なの、性別？ 種族？ それとも戒律？ はぐらかさないで、いっぺんちゃんと考えてよお……」

「……… 一方的な感情を押し付けしないで。理解の範疇を超えるわ。

あと聞き飽きた」

「私にはムラサが必要なの！」

必要とされるのは嬉しいこと。喜ばしいこと。存在証明と存在意義があるっていうのはとってもステキ。

コイツなら好きの意味、ちゃんと教えてくれるのかしら。ピンからキリまで、いろはにほへと、私が知らない感情を。

「迷惑かな……ムラサ？」

ああ こういう、しおらしい顔もできるのね。面構えは嫌いじゃない。むしろ好きな部類だったりする。

つややかに濡れた唇なんて、すんごく魅力的。私にだけしか紡がれない言葉が嬉しい反面、とってもうるさい。塞いでみたいと、思ったりね。

「迷惑って言ったら、それは嘘になるわね。はい。両手塗れました。動かないように」

「ムラサはずるいよお…… どうせ私置いてきぼりにして、庭の手入れいっちゃんうんでしょ？」

泣きそうな顔で見つめられて、立ち上がりかけた足を元に戻して腰を落ち着ける。草むしりの真っ盛りにはまだ程遠い。

木の枝だつてそんなには伸びてない。ちよつとくらい休憩してても誰も怒りやしないだろう。

それに、たぶん、コイツを置いて一人で行く方がきつとイライラす

る。

「んー…ぎゅむっ」

「ちよっと…何してるの？」

「分かんない。ぬえのぺちゃんお胸、ぱすぱす」

そのあとマニキュアが乾くまでずっと抱き着いていた。柔らかい、あったかい。前回の仕返しをするには丁度いい。そうね、私はコイツのこと、好きだったりしてね。

まさかね。だけどそのまさかがあり得えちゃったり、ね。

そつだ、牛乳を飲もう その3

朝はすんごく早いけど、実は夜寝る時間はそんなには早くなかったりする。かといって夜更かもしもない。

その日のうちに就寝、というのが暗黙のルールだったりする。まあ、お酒飲むときは破っちゃうんだけど。

私は一人で黙々と就寝前の写経に勤しむ。文字を書くという単純作業と墨のにおいが上手い具合に眠気を誘ってスツと寝付けるから。だから仏様には悪いけど心身をすっきりさせてるわけでもないし、内容もあんまり頭に入らない。聖、ごめんね？

しばらくすると障子の向こうから遠慮がちな声が聞こえて、

「ムラサいる？」

「あとちよつと……」

「写経？」

「うん よし。入っていいわよ」

枕を抱えたヒマ妖怪がやってきた。

「ムラサあー……」

「これはこれは夜遅いおでましで」

「えつと……一緒に寝ていい？」

「なんでよ」

「一輪の甘い卵焼き出来立てで食べたいから明日は早起きしたい。でも寝付けなくて……」

「何度も言うけど、私はアンタの母親じゃないのよ？」

「知ってるよ……」

「自分の部屋もらってるでしょうが」

「でもお……！」

「……………」

小さい子をいじめているような気分になったから諦めた。うつむいて、枕を握り締めている。頭のアホ毛はぺしゃんこだった。

「しょうがない。せめて布団も持ってきなさい」

「うえー…だつて部屋一番遠いじゃん」

「それくらい何とかしなさいよ。私もう寝るからね」

「やだやだ、だつたら一緒に布団で寝ればいいでしょ！ まだ夜中ちよつと寒いし！」

文机をどけて一組の布団を敷く。毛布はこの前、押し入れの奥底に突っ込んでしまった。

たしかに最近また寒さがぶり返ってきて夜中に布団を引っ張り上げる、というのも少くない。

昼間の、抱き着いたコイツのあったかさを思い出して心がぐらぐら揺れる。

天然のカイロは嬉しいけど、でもこれってどうなの自分。下手したら夜這いじゃないんだろうか？

「ムラサあ…ぐすん」

……うん。コイツにそんな度胸があるとは到底思えない。

妖怪としてどれだけ生きてるか知らないけど、生活の節々から鑑みて、どう考えても私より子供だもの。

「おいで。特別に入れたげる。この貸しは高くつくわよ」

「やったー！」

一組の布団に枕が二つ。みょうちくりんな夜になる予感。反対向いて寝よう。こら、あんまりひつつくなってば！

「寒い…」

風が吹いて戸が揺れる。ガタガタいう音が怖くてコイツの方を向いたら、口開けて寝てた。

コイツ……寝付けないとか言ってたくせに私より先に寝やがった。ぐっすり幸せそうに寝息を立てて、無防備な姿勢晒しちゃって。おまけにヨダレまで。気が抜けた。なによ、なによ。いっそのこと私の恐怖心を返して！

この際だからじろつと観察してみようかしら。

前髪が顔にかかって寝顔がよく見えない。

だからかき上げて顔を覗き込む。閉じられた目があった。

伏せられた長いまつげが僅かに震えている。

シミ一つない白い肌によく映える。私も地底がだいぶ長いから白いけどね。

まぶたの下にあるだろう赤い瞳をイメージする。

コイツが私だけを見て私にだけ呼びかけて……うん、悪くない。

口元に手を当てて呼吸を確かめ、完全に寝ているか確認した。呼吸の乱れはない。完全に眠っていた。

起きていれば自分勝手いい加減なことばかり言う口が、黙っていれば憎たらしいほど可愛く見える。

くつつきたいって、触れたいって、思った。だからね。

キスしてやった。
ほっぺたに。

赤い唇、赤い舌。
赤い瞳に赤い爪。

それと一緒に鮮烈な笑顔を思い出す。あれは、馬鹿にしてたんじゃなくて、このマニキュアが私に似合っつていう本心からの笑みだったんじゃあ。

『私のこと見て』って言ってた。私はコイツをきちんと見たことがあつただろうか。
コイツの言うことを頭ごなしに否定して、聞かなかったことにしていなかっただろうか。
好きって何度も言ってくれた。たぶん、本心から。だけど私はひとの言葉を信じるのが怖いから。嘘をつくのは、いつも口。

「アンタは、嘘つかない？」

寒くて寒くてしょうがなくて、布団に潜り込んで、さらにコイツの腕の中に潜り込んだ。あつたかくて安心して。
ぶるりと身震いひとつして、私は目を瞑った。

翌朝、私は寝坊した。

「一輪、何で起こしてくれなかったの!？」

「だってぬえと抱き合って気持ちよさそうに眠ってたから、起こしちゃ悪いと思ってる」

「卵焼き……!」

「そつち…? まあ心配しないで二人だけに新しく作ってあげるから」

「みんなにも謝んなきゃ……」

「そのことなただけ。姐さんが今日は休んでいいって言ってたわよ」

「え……?」

「毎日一番に朝のお勤めの準備してくれてるのがムラサだったから、そろそろ交替しましょうって。で、今日はボーナスのお休み」

最後に寝坊したのっていつだっけ。こんなにぐっすり眠ったのは久しぶり。不意だけどアイツの腕の中は心地よかった。

意識が浮上しかけてもまだまだココにいたいと思っただけなのに、むぎゅっとひつついて深呼吸して再び眠ってしまった。

ああ恥ずかしい。体温や鼓動なんか気持ちよくなって私を二度寝へとたぶらかした。あつたかぼかぼかだった。さすが動物、平熱が高いのね。

らしくないことが続いているように思う。でも、私らしさってなんだっけ。まっすぐに、清く正しく、真面目に。

図々しいし悪戯っ子だけど、嘘はついてないはず。なによりも、あの暖かさは信じてみたかった。

忘れられそうになかった……悔しいけど。

二人つきりで、ちょっと遅めの朝食。

いつもよりかは随分と早く起きたコイツは、一輪が作り直してくれ

た甘い卵焼きをつつつきながら大あくびをしている。
牙が見えて、さらにピンクのベロまで見えた。嘘つきは閻魔様に引
っこ抜かれてしまうというのは本当なのかしら。

「ぬえ！……私のこと、ほんとに好きなの？」

「あと何万回言ったら信じてくれるの？ もつずっと言ってるじゃ
ん」

コイツは私に、「好き」と言い続けている。それは終始一貫していて
歪みない。

そろそろ私もこの子を信じてあげる時期なのかも。もしも嘘なら、
私が引っこ抜いてあげればいいんだし。

「これから生活改善してくなら、考えて、あげる……」

「！？」

「悪いけど、言葉は信じられない」

「ムラサ、私、頑張るよ……！」

「私も、がんばってみるから」

「？」

それから何故か毎晩一緒に寝るようになった。

最初はすんごく嫌だったのだけど、コイツは夜に眠るようになり、
その結果朝も起きられるようになった。

朝食をちゃんとみんなで食べられるようになった。コイツも嬉しそ
うだったし、聖が喜んでいたのが嬉しかったな。

昼夜逆転の、妖怪そのものの生活リズムが整ってくる。おまけに寺
の手伝いをするようになった。

なんだ、やればできるじゃん。正直助かる。

私はアイツの爪みたいに出来ないのが口惜しいから頑張って伸ばし

始めた。

噛みたい衝動はアイツと接していない時に強く起こるようになった…… おかしいな。

だからイライラしないように、気休めかもしれないけど牛乳をたくさん飲んだ。

そしたらだんだん改善されていってイライラすることも、爪を噛むことも少しずつ減っていった。

おまけに背が伸びてアイツとの身長差は開いたし、胸も大きくなつたような気がする。ちょっぴりだけど。どっちも、とっても優越感。

「好き」という言葉を何度も聞いた。繰り返し、繰り返し、耳に残るくらいに。

「ほんとに好きなら自分で自分の腕、噛み千切ってみせてよ」とけしかけたら本当にしそうになつたので慌てて止めた。

一騒動終わってから、私はとてつもなく後悔した。操縦はしてもいい。曲がりなりに船長だから。

でも。弄んだらダメだ。ヤツは真剣なんだ。こんな私なんか……馬鹿な子。

きつと、根はまじめでいい奴なのよね。悪戯といつても人に危害を加えるわけでもなし。本当に嫌がることをするわけでもなし。

まったくもって聞き分けがないわけでもなし。うまく操縦してやればいいのだ。なんだ、簡単なことじゃないか。

ちよっかい、世話焼き、おせっかい。全部全部、私のためにしていたんじゃないのかしら。分かりにくいよ、馬鹿。

そうだ、牛乳を飲もう その4

まどろんで、世界が反転した。
深い眠りの淵で何かに呼ばれた。

紺碧の水面に投げ出され真つ逆さまに落ちていく。遠くなる光をぼんやりと感じて弱々しく手を伸ばした。

水流が大きな渦を描いて飲み込まれる。引き摺り込まれる。もう泳げないよ、体が重い。

苦しい、苦しい、いやだ、死にたくない、まだ死にたくない……。口を開けば器官に水が入り、どんどん重くなっていく。呼吸が止まる。

やりたいこといっぱいあるのに、苦しいよ、いやだよ、どうして私がかんな目に、誰か、誰でもいいから助けて……！！

「ムラサっ！！」

かっつと一つ呼吸をして、私は目を開いた。見慣れた部屋とおかしな顔のコイツがいた。なんで、そんな顔してんのよ。

「あ、はははははははははは！！！！！！」

笑いが止まらない。変な顔。整わない呼吸で無理やり息を吸って一気に吐き出す。

大きな空気のかたまりを吐き出したら肺がぺしゃんこになって、もう声も出なくなった。

酸素が足りなくて肩で息をしたら、なにかが喉に詰まったみたいになって動けなくなってしまうた。

「はは、はっ、は……」
「無理しないでいいよ」

目を掬われた。濡れていた。ひゅうひゅうと息を吸って考える。そっか、私、夢を見てたんだ。怖い夢を見た。自分が死ぬ夢。いつまでも終わらない悪夢が延々とループする。いつもなら息絶える間に聖が出てきて救ってくれるのに、この日は来なかった。

「無理しないで、いいからね。私が一緒にいるから、さ……」
「ん……」

伸ばされた手は、大きくはないけど優しく、あたたかかった。すっとまぶたを押えられて目をつぶる。

恐ろしい心象がフラッシュバックしやしないかと恐ろしくてたまらないから手を掴んで、握った。握り返され、脈拍を感じた。どくん、どくん、と。

それに反応するように自分の手のひらも脈打ち、このあたたかい手をきゅっと握った。すぐそばに、コイツがいた。

本当は寂しい、のかもね。怖い、んだと思う。あたたかい、優しいのが欲しいの。

必要とされたい。離さないで。

泣きじゃくる子供は私の方だった。

何かが壊れて溢れて、吹っ切れて、そんな自分に呆れた。当の昔に

分かりきったことを、目隠しでもしていたのかしら。馬鹿な私。ボケボケしてらんない。書物で勉強してみた。分厚い本をめくる。ぺらり、ぱらり。ひたすらめくる。何が書いてあるのか分からない。そもそも読めない。ただ、どうやら外の世界の言語は統一されていないようだ。

きつとこうやって国々独自の言葉に変えてゆく過程で言葉の輪郭が薄れていって本当に大切なことを忘れていってしまうんだと思う。言葉は飾りだから。騙れてしまうから。だから、もっと、ずどんと心に響く、簡単なやつがいい。

「あ……これ、いいかも」

そっだ、牛乳を飲もう その5

お風呂から上がって熱いから服をだらしなく着て。濡れた足でぺったぺった歩く。

一輪に見られたら絶対に怒られちゃうような恰好。

「ぬえー、お風呂上がったわよ」

「ん、分かった、ありがと。これ終わったら寝る」

生活改善を始めてからだいたい半年。ついにコイツも写経をするようになった。もしかしたら私より真面目にやってるかもしれない。元は猫背なのを我慢して、背筋をしゃんと伸ばして正座をして。後姿もなかなか様になっている。

終わるまで大人しくぺたんって隣に座る。さらさらって筆が紙を滑る音がして私は眠くなってくる。

「ぬえー終わった？」

「うん、終わった」

ぐくぐし頭を撫でられて目がトロンとしてくる。

そのまま耳の後ろを掻かれて眠くなったから背中にもたれて子どもがおぶさるみたいになる。

「羽じゃま」

「はいはい、仕舞うって」

「よろしい」

肩にあごを乗せて擦り寄る。いつからだろう。私がコイツに甘えるようになったのは。そもそも、イライラしていたのは何だったっ

け。

好きって言うくせに方々を遊び回って誠意を感じなかった。特定のひとに必要とされたことがなくて、女の子として見てくれたのはじめてで。

恥ずかしさと嬉しさがごっちゃまぜになってイライラしてた。朝は私の方が起きられなくなって、逆に起こされるようになった。毎日毎日、コイツの腕の中が心地よくなって、朝の当番が変わったことも相まって起きるのが億劫になって。

いつの間にやらコイツの腕の中が私の居場所みたいになって。世界中の誰よりも、一緒にいたいと願う相手。

それが紛れもないコイツ……ぬえになってたなんて。

……今なら言えるかな。

ううん、言ってもいいかな。

近付いた首筋から風呂上がりの石鹸とぬえの匂いが混じったのが、鼻腔に広がって落ち着くんだけど落ち着かない。

ずっとこうしてたいけど、動き出したい。まずは手始めに背中を離れ、隣に腰かけた。

最近蒸し暑くなってきたが、夜はまだ涼しい。ひつついても苦ではない。

大きくて、飲み込まれそうで。月明かりは燦々と降り注ぐ。青白い月。黄金色の月。月はいつだって美しく空にたたずんでいる。

さあて、今日の月は？

「……ぬえ、あれ、見て」

おもむろに指さし、注視させる。闇夜に輝く美しい満月だった。暗い空から、まぶしい真ん丸お月様が私たちを見つめていた。

「あー満月かあ。いいね、やっぱり妖怪としては一番好きな月」

「……月が、きれい、ですね」

「そうねえ。うん、きれいきれい。ほら、早く寝よつか。じゃないと悪戯しちゃうわよ？」

「しても、いいよ」

ぴゅうと風が吹く。経紙が翻った。目を閉じて、もいちど開くと、口を開けて牙むきだして威嚇するぬえがいた。

「何言ってるか分かってんの？」

「アンタこそ、さっきのことは、意味分かってんの？」

ぬえの目のなかに月が映ってる……きれい。でも妬げちゃうな。

真っ赤な目は見開かれている。やがて解を見つけたのか窄められ、焦点が定まった。私を捉える。

今は月も映さずに、その瞳のなかには私だけ。

「『わたし、しんでも、いいわ』……？」

「うん、正解！ すごく嬉しいけど、でも、死なないで欲しいな。だって好きな人に死なれたら私、困っちゃうもの」

あーあ。言っちゃった。答えはとうの昔から決まっていたけれど。どうしてだか、素直になれなかった。ごめんね、ぬえ。

小刻みに体を震わせ、唇は戦慄している。ずばつと羽が広がって奇妙に蠢いていた。揺れる声が聞こえた。今は、ちゃんと届く。

「やっと通じた……!!」

「今まで待たせて、ごめん」

「ううん、いいの、いいよムラサ、ありがと、ありがと……!!」

ぎゅっつと抱きつかれてあったかい。嬉しい。心がイライラとは懸け離れて、凧いでいるのが分かった。

「好き、好き、大好き、愛してるよムラサあ！」

「初めて好き、以上の言葉が聞けた」

「言うタイミング逃しまくって……ね、ね、キスして」

「その前に齧っていい？」

答えを聞く前に手を出した。

肩を引き寄せてこちらを向かせ、固定するために力を入れる。肩に爪痕が残る。

私は爪が伸びた。けどそのたびにぬえが綺麗に手入れしてくれるから尖ってはない。

皮膚に食い込んで、赤い半月がたくさん残る。爪の表面が、キラキラのラメがお星さまみたいに光る。

マニキュアが保護材の役割を果たすのか割れることがない。爪を噛むのをやめたら、ささくれもほとんどなくなった。

私の手は思ったよりつるんとした小綺麗な手だった。

噛みついた。かぶって噛みついて、ぢゅーっつと音を立てて吸う。歯型も赤いあともいっぱいついた。

やったあとで痛いかな、って思ってたぺろりと舐めたらくすぐったいのか笑ってた。

恥ずかしくなって、注意を逸らそうと思って、やってもらったみたいに頭を撫でて耳の後ろを搔いてやる。

喉をゴロゴロ鳴らしていた。にゃんこみたい。

「気持ちいい？」
「ムラサの手おつきくて気持ちいい……」
「可愛げのない手で悪かったわね」
「そんなことない。一番好きな手だよ！ 悪いことを言う口はこつしてやる！」

顎を確保され、口の中に指を入れられて、歯列と歯茎をなぞられる。喉奥につっこまれて、おえっしてしそうになった。畳を叩いて意思表示をするたびたりと動きが止まる。

「ケホっ…あんまり奥は、いや」
「じ、ごめ…！」

私も悪戯がしたくなってぬえの手首をつかんで動きを止める。ちろちろと指先を舐めてみた。
指先だけがほんのりと冷たい。末端冷え性なのかしら？ 私の啞内であったためたげる。
ねっとり舐めながら足を摺り寄せて体を密着させる。心なしか暑くなってきていた。だけどひつつきたいから、くつつく。

「ねえ、ぬえさ初めて……、なワケないか」
「あー……」
「だって少なくとも私の数倍は生きてるんでしょ？」
「あの、その……」
「どうしたのよ」
「あのね、えっとね、笑わないでね？」
「うん」
「一人でしか、したことない。で、す……」
「へー……」

たっぷり10数える時間はあつたと思う。嘘は言わないはずだから、きつと本当。

「…そうなんだ、意外」

「もうやだしにたい」

「死んだらダメよ」

ちよこつと、ちよこつとだけね。いじめたくなった。涙目のぬえの破壊力はハンパなかった。

人差し指でそうつと背筋をなぞる。耳にふつつと息を吹きかけて、ささやく。

「私のこと考えてしてた？」

「……」

「本当のこと言ってよ、別に怒ったりしないから」

「け、けいべつするでしょ！」

「私のこと考えててくれたんなら、嬉しいな」

うるたえる様が面白おかしくて、そんなもって可愛い。目をぎゅつとつぶって、ぶるぶる震えている。

もうこれは答えを言ってるようなものじゃないの。真っ赤になった耳が目について、あむつと食べてみた。

喉が渴いて仕方なくて、ぬえが引き止めるのも聞かずに部屋を出た。風に当たって頭が冷静さを取り戻す。

私…、ぬえと…愛し合ったんだ。

だるくて足をするように歩いているとまだ明かりのついている部屋があった。

一輪の部屋だ。中から書き物の音がする。なにか準備してるのかしら？

「いちりーん。まだ起きてるの？」

「ええ。掲示物変えないといけないから夜更かししちゃってるわ」「うーん…眠い」

「中道つていいでしょう？ あとムラサのだらしないとこ嫌いじゃないけど、それ見たらぬえ怒るわよ。胸もキスマークも見えてる」「えっ！…！」

慌ててさつと隠した。くすくす笑う声に、今はちょっと馬鹿にされたんだと思ってムカついた。

一輪の馬鹿。とつぶやくと、私が馬鹿ならムラサは大馬鹿ね。とあしらわれる。

「……私のあと、いっぱいつけたいのに上手くつかないの」「なら噛み癖なくすところから始めないとね。爪あと残らないわよ？」

好きも、愛してるも今なら分かる。きちんと伝えられる。

「爪を噛むのは完璧にやめるけど、噛み癖は直さないわ」「なんで？」

「だって私の噛みあと、つけたいもの！」

そんなこんなで、私は今でもお風呂上りに牛乳をコップ一杯飲むのが習慣となっている。

なんでって？ 爪が伸びるような気がするから。あ、でも前より硬くなって割れにくくなった。

イライラするのが抑えられるような気がするから。

正直、ぬえと恋仲になってからイライラするのは、ほぼなくなった。それはそれでムカつくんだけどね。

背が伸びるから。背は抜かされたくない。いつまでもこの優越感は渡さない。

私の方がちよつとだけ高い。これがキスしやすい差だって知って、余計に喜んだのは内緒。

胸が成長するような気がするから。柔らかいのが好きなんだって。ばか。へんたい。えっち。

「ムラサ！ おっぱい触らして！」

「馬鹿あー！」

片手は牛乳パック、もう片方はグラスで塞がっていたので蹴り上げた。

きゃん！と犬だか、どこぞやの死神みたいな声を出して逃げ転がっていく。ほんと、馬鹿な子！

牛乳を注いだグラスを持つ私の手は、今日は薄ブルーのマニキュアで彩られている。

「海つぽいのがいい」とリクエストしたらこれを塗ってくれた。いたい何色持っているのやら。

遙か遠い、記憶の彼方の大海原を幻視して思いを馳せる。いつか、

ぬえと一緒に海を見てみたいな。

「むらさあ……ハグならいいでしょ？ ハグハグー」

「しょうがない子ね。ほら、おいで」

本当に馬鹿な子。

ばかばかばか。でもって馬鹿な私。

ねえ、お願いだからさ、離さないでよ。

「ぬえ、大好き」

首に手を回して抱きついて、その首筋にそっと噛み付いた。

… かぶっ！！

そつだ、牛乳を飲もう その5（後書き）

ギリギリR - 15...か？

夏ですよー

じわじわと蝉が鳴き、汗が吹き出す。照りつける太陽が容赦なく体力を奪い、些細なことにもイラつく。

心なしか蝉が鳴くたびに暑くなつていくような気さえする。微弱な風が吹いて、軒先にぶら下げられた風鈴がりいんと申し訳程度に鳴る。

「あー何でこの世界には海がないのかしら。暑い、あつい、死んじやうわ…もう死んでるけど」

畳へばりついて溶けそうなムラサは呟いた。嫌なこともあつたけど、やっぱりムラサは海が好きだった。

今願うことは冷たい海水に頭からどぼんと飛び込んでばしゃばしゃ自由奔放に泳ぎ回って涼をとりたいということだけだった。

頭の中には海。心の中にも海。口からも海。暑さにやられて呻いていた。

「海、海行きたいよお、……海い、うみいいい」

村紗水蜜、舟幽霊。水とは切っても切れない彼女である。

白いセーラー服は汗を吸いすぎてぐっしり重みを感じていた。

「海行きたいよおおおおおお！！！！ 暑い、太陽の馬鹿野郎！

！！！！」

「ちよつと、さつきからうるさいんだけど!？」

蝉に負けなくらいの大声を上げたムラサに、畳の隅に同じようにへばりついている黒ずくめの少女が抗議の声を上げる。

「うるさいから黙ってて、余計に暑く感じる」
「あんたこそ、その格好どうにかしなさいよ。真っ黒けっけで見てるこっちが暑苦しいわ」

黒ずくめの少女、ぬえはバツが悪そうな顔をして黙った。たしかに少し暑いし、暑かしい見目だという自覚は嫌というほどあった。けれど夏服用の薄い生地ワンピースだし、なによりこのデザインが好きなので違う服を着る気にはなれない。

「あとその長つたらしい髪も切ったら？ さっぱりするわよ？」
「嫌よ、髪は女の命でしょ！」

ムラサはつい先日、肩につくか、つかないか…という長さまで髪を切った。
だからぬえのセミロングの髪が汗で首に貼り付いているのがどうも目につく。

私が切ってあげようか？というムラサの提案をぬえは即座に断固拒否した。

「ねえそれ白い服だからブラ透けてるよ」
「えっち！」
「そりやどーも」

ぬえはムラサの胸部に手を伸ばし、意地悪しようとしたがムラサはぱしんと払いのける。
のけられて、伸びた爪が並ぶ手は、猫のようにきゅっと丸められた。ぐうと唸る。

「そつちこそ、ミニスカだから捲れてパンツ見えてるわよ」

「すけべ！」

「おあいこさまよ」

ムラサはぬえの捲れたスカートあたりに足を伸ばす。

さらに捲り上げようと足癖悪くスカートに触れるが、ぬえはパンツが見えるのもお構いなしに其れを足蹴にした。

蹴られて、ムラサは胎児のように足を抱えて丸くなった。むうと口を尖らす。

そつちやって黒髪少女たちはやいのやいのと無意味な会話を繰り返し、熱を帯びた背中を救うために新たな冷たい畳を求めて転がった。

ごろごろ転がっているうちに手がぶつかつた。重なって、見つめあう。どちらともなく、汗でべとつく手を握つた。

「ぬえ、あんた顔赤いわよ」

「そつちこそ」

「私は…暑いだけよ」

「私だつて…！」

双方ともに、手も視線も外さない。気のせいか、更に気温が上がっているような気がしていた。

蝉の声と肌を伝う汗の感触だけをやけにリアルに感じる。どきん、どきんと鼓動が鳴って、ごくりと唾を飲む。

乾いた唇を無意識のうちに舌舐めずりしていた。瞳に焰が灯る。

「あらあら、熱いわねえ」

ほくほくと湯気の上がる盆を携えた一輪が颯爽と襖を開けた。

風が部屋という部屋を駆け抜けて一抹の涼しさを与えてくれる。

「い、いいいい、いいいいちりん!!!!!!」

おまけに火照った体も幾分か冷ましてくれたようだ。二人とも素っ頓狂な声を上げてパツと手を離す。

あーとか、うーとか呟いてみたり、こめかみのあたりを搔いてみたりする。バレバレであり、逆効果である。

「そのまま続けても良かったのよ？」

「いや、あの、ホント勘弁してください」

ぬえは両手と6本の羽全部を使って畳に伏せ、平謝り。対するムラサは「え、いいの？」などと抜かしている。

一輪は笑みを絶やさない。……命蓮寺は今日も平和だ。

「ね、一輪、それなに？ いい匂いするけど……」

「あ、そうそう。これ今日のおやつね」

未だ畳に別の意味でへばりついているぬえを余所に、ムラサは盆にかけられた茶巾をちらりとめくる。

もあつとした湯気が立ち上り、それが晴れると真っ黄色の物体があった。

つやつとしていて、ぷりっとしていて、食べる前から「おいしい!」と言えそうな代物だった。

「トウモロコシだ！ すごい、もう市場に出回ってるのねー」

「え、トウモロコ、シ……?」

「ぬえ、顔を上げなさい。あなたこれ好きでしょう?」

額に畳のあとがついて間抜け面なぬえはぼかんと黄色い山を見つめ

ていた。開いた口がふさがらない。食指が動くのか、指先だけ細かに動いている。

ムラサはぬえとトウモロコシを結び付けようと躍起になって考えていたが、無理だったので直接本人に聞くことにした。

「え、ぬえ、トウモロコシが好きなの？」

「うん、実はすごく好きで…一輪すごいね、何で、知ってたの？」

「この前、雷獣に関する書物を読んでね。まさかとは思ってたんだけど、今日 八百屋さんに行ったら売ってたもので、つい…」

「やったあああ！ 一輪ありがと、大好き！！」

「どういたしまして。さ、二人とも召し上げれ」

ぬえは顔ほどもある大きさのトウモロコシを手にとり、子どものようににはしゃぎながらかぶりつく。噛んだ瞬間に汁が溢れ、甘く濃厚な香りが口内に広がる。

縦に横に。ぐるぐる回しながら。夢中になって食べるぬえをムラサと一輪は後ろから見ていた。

「なによ、あんなに嬉しそうな顔しちゃってさ…」

「あら妬けるの？」

「別に」

「相手は野菜よ？」

「……知ってるわよ、一輪の馬鹿！」

「はいはい、ほら水蜜もあっちの縁側で食べてきたらいいわ。ついでにぬえも引っ張って。あの調子で食べられたら畳に汁が飛んじやうから」

「はい」

りいん、ちりりいん。

開け放した襖の向こうから風が吹いて、さっきよりも風鈴らしく揺らめきながら心地よい音を立てる。

相変わらず蝉はうるさいし、太陽も憎たらしいくらいに元気だったがさっきよりは暑さを感じなかった。

二人は縁側で足を投げ出し、ぶらつかせながらトウモロコシをかじる。

「ぬえ、おいしい?」

「うん、これすっごく甘いね。それに湯で加減もちょうどいいし」

「好き?」

「うん!」

「私のことは?」

んふふと笑いながら尋ねるムラサに、ぬえはより一層微笑む。

「大好きだよ、水蜜」

「それだけじゃ嫌だ。さっき一輪にも大好きって言ったでしょ」

「気にしてるの?」

「ちよつと怒ってます」

「えーどうしたら機嫌直してくれる?」

「キスして、ぬえ?」

二人してくすくす笑って。くつついて、触れて。距離がゼロになるまで。

鼻から息が抜けて、くたりと力が抜けて、ムラサはぬえに寄り掛かる。

「今日のキスは甘いね。トウモロコシ味だわ」

「水蜜の唇のほうが甘いよ」

「うそばかり」

「本当だよ」

ぴゅうと風が吹いて、風鈴が涼しげな音を立てる。

手を繋いで、擦り寄って。

さて、暑い暑いと呻いていたのはどこの誰だったか。

そのあと、一輪は氷水を張った桶を持ってきてくれた。二人は我先にと足を突っ込み狭い桶の中で押し合いへし合いの場所取り合戦を繰り広げた。

其れを襖の向こうから覗いていた星とナズーリンは熱くて敵わんと退散する。

桶には白い4本の脚がまぶしく輝いていて、同じく覗いていた聖は若いっていいわね…と仏の笑みを浮かべていた。

夕飯はそうめん、透明の器に入れられた白い麺が視覚的に涼しく、また冷やされた麦茶も併せて食感的にも涼しくしてくれた。

食後に「花火がしたい」という話題が上り、なら今度買ってみんなでやろうと満場一致で決定した。

「みなみつー、髪乾かしてー」

「えーまた？ 自分で乾かせるでしょ？」

「だって面倒なんだもん」

ぬえは毎日風呂上りに髪を乾かしてくれ！とムラサに要求する。そしてムラサも、面倒と言いなながらも満更でない表情で構ってやる。がしがしとやや乱暴にバスタオルで拭いてドライヤーで乾かして、仕上げに櫛で梳く。癖のないさらさらストレートが完成した。

「ほら、だから私が切ってあげるって言ってるじゃない」

「嫌って言うてるの！」

(だって切ったら構ってもらえる時間減っちゃうじゃない？)

「さー寝ますか」

「ん、ぬえ布団引いてね」

「はいはい」

「はい、は一回でよろしい」

「はい」

ムラサはぬえが布団を引く間にぶたの形の蚊取り線香に火をつける。練り込まれた薬草の香りが漂って夏を感じた。

「いいよー」

「ありがとう、じゃ寝よっか」

「うん、おやすみ水蜜」

「おやすみなさい、ぬえ」

布団にもぐりこみ、薄い掛布団を羽織る。明日も暑いだろうけど頑

張ろう。

二人は仲良く手を繋いで眠りに就いた。

翌朝。蚊取り線香を焚いたというのに、彼女らの首元に吸われたよ
うな痕があったとかなかったとか。

ぬえむらは少量でもげろりと甘い(前書き)

ぬえとムラサは常時これくらい甘いと思ってます。タイトルはことわざ『山椒は小粒でもぴりりと辛い』より

ぬえむらは少量でもげろりと甘い

「この『ポッキー』っていうの、二人で両端から食べて残り5mmまで食べたらいいんだって」

説明するムラサの綺麗な指しか目に入らない。ポッキーといわれるものを持っている。白魚のような手……というわけじゃない。ただ私には綺麗に見える。大好き、だいすき。錨を扱う大きな手。この前大きさ比べしたら私よりちよこつと大きかった。

「外の世界では11/11や2/14にこのゲームをやるんだって」説明する水蜜の口しか見えない。忙しく動く。赤い唇が動くたびドキリとする。ふつくら柔らかか。大好き、だいすき。時折、歯や舌が見える。私の名前を呼んでくる。想いを囁けば愛していると応えてくれる。

「これは罰ゲームに使われるものなんだって。おいしいのに」
ぱり、ぱり、と。

ムラサはポッキーを食べた。チョコレートがかかった部分がどんどん飲み込まれていく。あつという間に食べられた。

「ぬえ、やるつか？」

歯で挟んで、んーと唇を突き出した。目を閉じる。緑の瞳が隠れた。睫毛が揺れる。

私は向かいに手をついてもう一方の端を含んだ。その振動に反応してムラサの目が開く。水蜜の緑と私の赤が交差する。微笑まれた。

私はニヤリと笑い返す。歯を立て、ぱきり。とポツキーを折る。ムラサがくわえたままの部分ごとさっと奪って全部食べた。甘いチョコレートの味がした。

「え、ぬえ…なんで？」

「失敗したら罰ゲームでしょ？　どんな罰？」

「……キス、するんだって」

まどろっこしい。初めからキスすればいいのに。ああでも、焦らすからいいのか。

乗りかかってキスをした。唇を触れ合わすだけのキス。ムラサは大人しく目を閉じていた。最後にちゅう。と音を立てて吸うと首の後ろに手を回され、抱きつかれた。

「罰ゲーム、なった？」

「こんなの…どっちにもご褒美じゃない」

「そうかもね。ね、どんな味がした？」

「……チョコレートだった。甘かったわ。でも足りない」

「ねえ水蜜。なにがほしい？」

とびきりに。うんと甘い。

耳元の声は熱っぽかった。

ならば。ぐずぐずに蕩けるようなのをあげようか。
ひとまずは……。

「愛してる…」

とびきりの、言の葉を。

がぶ　ペろ　ちゅっちゅ！(前書き)

前半はムラぬえっぽいですが、作者のジャスティスはぬえむらです。

この子たちが延々とお互いをかじりあって、ペろペろしあって、ちゅっちゅしあつ話はどこに行けば読めますか。

がぶ ぺろ ちゅっちゅ！

風呂上り。長い髪を手前に持っていき、タオルで乾かしたり、櫛を入れたりと丹念に手入れをしている彼女がいた。普段見えないようなじが無防備にお目見えしていて、どきりとする。背中では前屈みの猫背で歪んでつぶれていて、実際の座高よりも低く見える。身長だつてほんとは私より大きいのに猫背のせいで小さく見えるし。もったいない。星のようにすらりと高身長ではないけれど、ハグしてふぎゅっと抱きしめられると頭まで包まれて安心する。ちゅーするのにも、たまに背伸びするくらいには彼女は大きい。態度が子どもっぽいからあんまり分かんないけども。

「ぬえ」

大好きなひとの名を読んでみる。気付いてくれるかな？とか、どんな顔して振り向くんだろう？とか。あつたか恥ずかしい気持ちでぼわんぼわんつてなる。産毛もほとんど生えていない真っ白な首すじから石けんのおいがして、夏の暑さで滲み出た汗と混じって世界にいつこだけの香水みたいに香っていた。

……振り向いてくれない。気が付かないのかな。たしかに小さな声で呼んだんだけど。抜き足、差し足で忍び寄って、一見頼りなさそうな肩に手をかけた。

「うひゃう？！」

「これぐらい気付きなさいよ。敵だつたらやられてるわよ？」

「いや、ここは安全だつて思い込んでるから……」

まるで猫が全身の毛を逆立ててびっくりしたような反応だった。

それは、つい、意地悪をしたくなるくらいには可愛い反応。

「さっき呼んだんだけど。ぬえってば酷い！」

「い、いやね、ムラサってば空気みたいなモンだし」

「なあに、いてもいなくても変わらないうって言いたいの？」

「ち、違つわよ逆！ いるのが当たり前で、でもっていないと困るの……！」

「へえー？」

「あつ……」

言ったあとに言葉を反芻して、顔が赤くなっている。無意識にこういうことを、さらりと言ってくれるのは、正直……嬉しい。なんにも考えない状態で、彼女の中に私がいるんだなって分かるから。だけど、どう見てもさつきより髪を乾かす手が早くなっている。こうやって恥ずかしがってるのを見ると、余計に愛しく思えてくる。別に男の人みたいに強く、逞しく、カッコよくっていうのを求めているわけじゃない。だから彼女のめいっばいで私を愛してくれてるのを感じられれば、それだけで十分に幸せ。

ぐにやりと歪んでいて、湾曲している首の骨が目について、釘づけになる。煮込んだらいいダシが出そうとか、丸焼きにしたら上等な一品になりそうだとか、ただ単純に、かじったら美味しそう……だとか。

頼りなさそうな両肩に手を置いて、背後にどっかり陣取って背中にもたれかかった。けして広くはないけれど、私はこの背中を信頼している。小さく見える背中中は実はしなやかな筋肉で覆われていて、頸椎から尾骨まで続いている。幻想郷ルールだけで飛んでいる私と違って自力で飛ぶことができるから、私にはないがっしりとした筋肉が無駄なくついでいて、美しかった。普段は柔らかく、しなやか

に。瞬発力を必要とするときだけ盛り上がってばびゅん！と飛ぶ。脂身が少なくてたんぱく質が多そう。まるでササミね。

「羽が刺さるわ」

「だって仕舞ったら背中ツーツてやるんでしょう」

「何か文句あるの？」

「だって、あれ、痒い、」

「無いわよね？」

「……ない、です」

「分かればよろしい」

赤青3対、6枚の羽があつという間にどこかへ消える。この薄っぺらい胴（言ったら怒られそう）のどこへ仕舞っているのか、常に不思議でならない。肩甲骨が薄いパジャマの布地から盛り上がっている。遊ぶように指を這わせた。ふにゆううと腑抜けた声を出してくすぐったそうに身を擦るけど無視してくすぐる。背骨に沿って首からおしりまでなぞる。ついでにおしりをもっちゃり、むっちり撫でまわす。お次は下から上の方まで逆撫でしてみた。

「髪いじっていいわよ」

「む、りい」

「ふふ、可愛い」

左手はお腹の方に回して抱き寄せる。頭をぐりぐりして、耳をくつつけた。鼓動とぬくもりを直に感じて幸せ。口元がちょうど彼女の首すじにきたから擦り寄って、ふう……っ息を吹きかけた。そしたら面白いくらいに体が跳ねて、気分がよくなる。いつも悪戯されてばかりじゃ割に合わないから、仕返しよ？

れるりと首すじを舐める。私は彼女と違ってやっぱり人間だから、舌のざらざらがあんまりなくて、摩擦が少なくてつまらない。風呂

上りのにおいが時間と共に変化していつて今は体臭の方がやや勝っていた。私にだけの媚薬みたいで頭がくらくらする。

「はあ、はあ……ぬええ」

「あつ、んう……！」

「くすぐりたい？」

「みなみ、つう……こしょぐつたいよお」

「知ってる？ くすぐりたい所ってね、性感帯になる素質があるんだって」

「そんな、……豆知識いらないつてば」

「こしょこしょ」

「ふあう、背中やめてって」

「うりうり、うりゃー」

ああ、もう、ぬえってば可愛いなあ……。

「いい加減に怒るわよ？」

「えっ？」

「人間は妖怪に食べられるものなんだから！」

油断をしていた……あらあら、押し倒されてしまいました。もう、遅いんだから。このへタレ！

「痛かったら言っつてね」

「歯医者みたいね」

「鶴です……あむっ！」

羽を広げた彼女に上に乗られて、喉元に噛み付かれた。凹んだ部分が多い喉だけれど、彼女の牙にかかれば何の問題もなく皮膚に届く。本気で噛み砕くような強さはないけれど、甘噛みというには些

か凶暴なじやれだった。鼻息荒く、夢中になってくれるのはいいとして、やられる身としてはちょっと痛い。鎖骨に噛み付かれてちくりとした痛みが走った。がむしゃらに、がじがじと食いついてくる彼女の頭を撫でる。まだ風呂上りの湿り気を帯びていた。

「ムラサあ……あとつけていい？」

「だあめ」

「何で？」

「だって前の消えてないもの」

「消える前につけたいの」

「このケダモノ。私にマーキングなんてしなくても誰も取りやしな
いわよ」

「やだやだ、つけないの、ちゅー！！」

「待て！」

「うっ……！！！」

ぴしつと硬直して彼女が動きを止める。中途半端に出た舌が間抜けで可愛い。私の出す号令を律義に聞いて守ってくれる。顎下をくすぐるように撫でて、耳の後ろを搔くように、髪に指を通してやる
と「もつとやって！」と言わんばかりに伸びをした。でもここでやってあげたら面白くない。

「お・あ・ず・け」

「ぐるるる……」

「それに私、つけられるより、つけるほうが好きなの」

「うがう！ けちんぼ！」

「髪乾かしてあげるから大人しくしてなさい」

* * *

彼女の髪は真っ直ぐさらさらで。私のうねった髪とはまた違ったさわり心地がある。うっとり目をつむった彼女の髪を乾かすのは、お母さんになつたみたいない気分がした。ねえ、あなたはよく乾かしてとねだってくるけれど、私の方がいじりたいということを知っているかしら？ おんなじシャンプーを使ってるのに、同じにおいにならないことを知ってるかしら？

「何だか眠くなってきた……」

「いっつもそれね」

「だってムラサの手が気持ちいいんだもん」

「ほれほれ。褒めても何も出ないわよ」

「んうう……、はう……」

「ちゅーしようよ、ぬえ」

「ん」

振り向いた彼女に肩を掴まれ、頭を固定された。唇が触れて、私は反射的に目を閉じる。ちょいちょいと背中をつつく合図を出すと無言で抱きすくめられた。これが一番安心する。彼女の腕の中は私の特等席！

ちゅっちゅと小鳥のように可愛らしく啄むキスや、んべえと伸ばした舌だけを口外で絡ませあうキスも好き。だけど、息もできないくらいに唇をぴったり重ね合わせてゆっくりと愛を確かめあうキスが一番好きだったりする。体中をすりすり擦られて腰が抜けたみたいに脱力してしまう。舌を伸ばすと絡めとられて、とんがった牙で甘噛みされた。

「ん、ふっ……くう」

鼻から息が抜けて甘い声が漏れ出てしまっ。無意識で肩に爪を立てていた。

「んー、ちゅう、ぱっ」

「はあ、はあ、あ……」

「ムラサの顔、やーらしー」

名残惜しそうに口周りを舐める彼女の方がやらしいと思う私はぬえ馬鹿もいとこなのかもしれない。

でも……好きだし。ねえ？

「顔真っ赤。りんごみたい」

「あら、空気じゃなかったの？」

「もう、終わったことほじくり返さないでよ！」

「私に勝とうだなんて100年早いわよ」

彼女にとっての私が空気なのならば。私なしでは呼吸もできないくらいの関係になりたい。

でもって、酸素に触れてもっと激しく燃え上がるような恋にした
い。

「じゃあ100年後も一緒にいようね」

「まあ、そういう嬉しいことさうりと言っ……」

「ぬゆふふ。ちょっと恥ずかしいけどね！」

ああ、もうぬえの馬鹿！ 大好き！！

甘いものが食べたい(前書き)

すっぱい甘いと甘酸っぱいのニュアンスの違いは、すっぱい甘いはすっぱい、甘酸っぱいはだいたい甘い。くらいに思っています。

甘いものが食べたい

甘いものが食べたい。

寺の経費と、それとは別の家計簿とをつけていたムラサは急に思った。ムラサは読み書きそろばんを満身に習ったことがない。できなくはないが数字の羅列を見ているだけで頭が痛くなってきた大変疲れる。しかし頭痛の原因はそれだけではなかった。

今月の寺の経費は弾幕ごっこの修理代がかさみ、紙や墨が満足に買えない。あと意外に高いのがお供え物。どうせ置いておくだけだし、さらにいえば後で食べてしまうのだから、ずっと飾っておける干物や干菓子を置けばいいとムラサは思うのだが。

きちんと数や種類が決まっているらしく、聖の願いもあって本像前にはいつも瑞々しい青果が誇らしげに溢れている。しかも毎日取り替えるのだからもつたいたいなあと思えない。

片面だけ鯛を食べる殿様にひっくり返した鯛をもいちど出すという昔話ではないが、なにかしら同じような方法で日持ちさせられないのか。もつたいたい。

そして普通の家計簿も火の車。二尾の赤猫も真っ青なくらいのやりくりをムラサは随分長いこと繰り返していたのだった。収入がないわけではない。しかし聖は優しすぎるのだ。設備を増やすだとか、言い方は悪いが檀家を増やすための施しとかなら分からもない。いや分かるうとするだろう。

みんな無駄使いが多いのだ。あれが欲しい、これが欲しいといえ
ば聖はオーケーを出してしまう。そうしたらムラサも泣く泣く財布
の紐をゆるめるしかないのだ。

これ以上経費からは一文たりとも減らしてはならない。しかし疲
れた。どっと疲れた。甘いものが食べたくて仕方がない。ムラサは
奥の手を使うことにした。

星の部屋にこっそり忍び込み、そっと戸を閉めた。宝塔が紫色の
座布団の上に鎮座している。携帯しなくて良いのかという疑問はこ
の際放っておこう。宝塔には砂鉄こびりつく磁石のように、びっし
りと小銭が張り付いていた。もはや星の能力は宝塔の能力なので
ないかと疑うほどだ。

ムラサはそこから何枚かくすねてポケットに頂戴した。これで里
で何か買おう。どうせ小銭がなくなつて宝塔が剥き出しになつたと
ころには、また新たな小銭が張り付くだろうから問題ない。

逸る気持ちを抑え、来たときと同じようにそっと部屋から出る。
あとは火元と戸締まりをしつかり確認してから人里へふわふわ飛ん
でいった。

和菓子というものは総じて美しい。四季の移り変わりを目で感じ
ることができる。でもって甘い。洋菓子というものは総じてキラキ
ラしている。卵やシロップでつや出した表面など輝いて見える。
でもって甘い。

お菓子屋の軒先で固まりながら考察すること数十分。何を買おう
か悩む乙女の横顔は恋する表情に通じるものがある。ムラサは甘い
ものなら何でも好きだった。甘味に貴賤なし。どれも口中を楽しま

せるものには変わりはない。

勝手に買い食いしたとバレてはあまり良いことはない。さらに手持ちはあまりない。また食べ過ぎて夕飯が食べられなくなって一輪を悲しませる。手頃なサイズ、値段、満腹感。でもって甘い。欲をいえば保存して今日以降も食べられるもの。これらを満たす素晴らしいものを多種多様な陳列品から選び出さねばならなかった。

「あ……、おじさんこれ下さい」

茶色の包みに入れてもらって意気揚々と命蓮寺へと帰る。途中いくつかのカップル共の痴話喧嘩に巻き込まれそうになったが華麗にスルーした。一輪が夕飯を作り始める前には何事もなかったかのようにシャンとしていなければならないからだ。

中庭にふんわり降り立ち、周りに誰もいないか見渡す。さながらスパイのように前後左右の人影を確認してからこそそっと自室へ飛び込んだ。ムラサも何だかんだで聖にねだり買ってもらったものがある。ぼわぼわでいつまでも触っていたくなる心地のクッションだ。その薄ブルーの短い毛足のクッションに寝転がって大きな息を吐いた。もう計算はうんざりだ。

「誰か代わりにやってよね……ナズあたり算盤得意そうなのに」

茶色の包みをがさごそして取り出したるはちんまい瓶。その中には夢が詰まっていた。

「あー……でもそしたら私のお仕事なくなるかしら」

仰向けになり、瓶を日に透かしてみた。色とりどりの飴玉が誘惑するように輝いて瓶中を転がる。ムラサは飴玉を瓶に詰めてもらったのだった。

個数を指定して買えばそんなに高くない。瓶に入れていれば保存はきくし、ひとつひとつは小さいので食べられる。見た目も美しく、特に転がっていく様はいつまでも見ていたくなるような光景だ。ゆっくりねぶれば長く楽しめるし、ボロボロこぼすこともない。もちろん寝そべって舐めることだって可能だ。でもって甘い。

女の子にとって甘いは正義である。おかしとは。体中の強張りが抜けてふにゃふにゃになるだけの魔力を秘めたる素晴らしいものだ。

「どの味にしようかなー」

瓶を振って飴がぶつかる音を楽しむ。味を選ぶ楽しみだつてある。ムラサの目には、その瓶は小宇宙のように映る。その小宇宙の中から最もふさわしい味を選び取るのだ。

「……………まずは、レモンにしよう」

職務から解き放たれ、自室でだらだらと甘味を頬張るムラサはただの女の子だった。

すっぱ甘い飴玉が口中を転がる。歯に当たって、かこんかこん鳴る。世の中では、はじめての口づけというものはどうやらレモンの味がすると言われているらしい。ムラサは己の記憶を探った。味蕾は確実にすっぱ甘いという刺激を受け取って、同時に胸中は甘酸っぱい記憶が蘇っていた。

『む、むらさあ……………ね、キスしていい?』

そう尋ねられたときの照れた表情、上ずった声、やけに強く握られた両の手。落ち着かない自分の心、熱いまなざし、うるさい鼓動。それらの全てを今でも鮮明に思い出すことができる。近づいて感じた吐息、触れたくちびるの感触、柔らかさ、湿り気、ぬくもり。記憶の糸を手繰り寄せては恥ずかしくなる顔を隠すためにクッションに突っ伏す。そのままごろごろ転がった。

はじめての口づけはレモンなんかではなく。
とろけそうにあつく、ひたすらに甘かったことをはっきり覚えて
いる。

「う、うわああああ、やだ恥ずかしいぐっ、うっっ?」

レモン味の飴玉は臼歯に押しつぶされ粉々に砕け散ってしまった。
あーあ、勿体ない。ムラサは落胆しつつも飲み込んで次の味を選ぶ
ことにした。

「ねえ……さつきから何やってんの?」

呆れ声がして、顔を上げるとそこには。

「暑さで頭でもやられたの?」

はじめての口づけのお相手がいた。

ムラサは至極慌てた。いや、素顔を顔面に貼りつけて「別に?」

と返しても良かったのだ。そうできなかったのは、やはり惚れた弱みなのか。目の前の少女がいると、どうにも自分は自分でなくなるらしい。それとも。まったくの逆で彼女がいるから自分は自分になれるのか。教えてよ、ぬえ？

「何してたの？」

「あんたこそ」

「山の巫女んところにお使い頼まれててね。今戻ったとこ。ついでに神様からお酒貰ってきたのよ！」

酒瓶ぶら下げどや顔で決めるぬえはちょっと滑稽だった。クツシヨンに突っ伏しすぎたせいで額に赤いあとが残ったムラサもなかなかいい勝負ではあったが。

「あー！ それ飴買ったの！？」

「うげっ……！！」

「えー私にもちよう дайな。あといい加減そうやって隠れて買うのはやめた方がいいと思うけど？」

「だって怒られ、」

「るわけないじゃん。みんながどんだけ甘いか分かってないの？」

ムラサは今までもこうやって内緒でおかしを買って見つかったことがある。しかし、ぬえが言うように怒られたことない一度もない。怒られないだろうと分かっていても、なかなか言い出せないのだ。だって「え、おやつ足りないかしら？ 大変、明日から大量に買ってくるよ」とかになって余計に家計が火の車になるのは目に見えている。家計圧迫をしないためにわざわざ宝塔からひっぺがしているのに……。

「あ、そっか今度から星に言えばいいだけか。それにもっと弾幕ご

つこする場所をきちんと指定しておけば修理代かさまないし」
「飴ちようだいって。いちご欲しい、いちご」

ぬえはしゃがみこんで瓶をムラサから奪いとる。あっと短く不満の聲が漏れた。

「いちご、いつこしか、ないね」

「だって私だけのために買ったんだもの」

「じゃあ一緒に食べたらいんだよ」

「……ばかでしょ」

「頭いいと思うけど?」

そう言うや否や、ぬえはピンクの飴玉ひとつぶ口に放り投げ、ムラサの肩を掴んだ。

「ムラサ、ベーってして」

「ん、え。べ、ベーっ?」

「そう。キスするね」

唐突に触れる濡れた唇、甘い舌。ざらめの付いたいちごの飴玉は二人の間を行き来する。舌で押し込んで、ついでに甘い唾液も流し込んで。舌の上に受け取って転がす。ざらめが取れるたびに甘さは増す。いちごの甘ったるいにおいが鼻についた。

「んくう、ちゅう、ちゅちゅうつうつうつう」

「はぁ、ちゅるるう、くちゅん、ちゅ、ちゅ……」

ぬえのざらりとした舌がムラサの口内にある飴をねぶる。互いの舌と舌で飴を挟んで両側から少しずつ溶かし舐める。かたまりが溶けていくたびに、理性もとろけだす。ムラサはさすがにぬえに

抱き着いていた。

どちらのものともつかない唾液と声が口から漏れ出す。ちょうど二人の間にあつたクツションに垂れていった。薄ブルーが次第に濃い青へと変わっていく。主成分は飴玉だからどろりと粘着く液体が毛足に絡む。こいつらイチヤつきやがって。爆発しろ。そんな呪いでもかけているようだった。

「んやあ、っ……ふう、んん」

「ちゅ、っば。甘いね」

かつての恥ずかしがってキスの許可を求めるぬえはもういなかった。ギラついたまなざし、荒い呼吸。誘うように覗く赤い舌がちろりと口周りを舐めていた。強烈にいちごの味がして、だけどやっぱり、とろけそうにあつく、ひたすらに甘い。

「いちごが甘い、ざらめが甘い」

「えーそれだけ？」

「……ぬえとのキスが、あまい」

ムラサは、ぬゆふふと笑う声が耳元にして、気が付くと抱きすくめられていた。頭をよしよしと撫でられる。体は脱力していつてぐにゃんと伸びた。

「毎日お仕事お疲れ様。ムラサはえらい、頑張ってる、よしよし」

「ぬえ……」

「まあ甘いもの一つや二つも欲しくなるものよね」

「あんたが毎日ぎゅーってしてちゅーってしてくれたら買い食いやめるかも」

きよとん顔のぬえにムラサは迫る。早鐘が胸を打つ。

ぬえはムラサを撫でる手を止めない。

「んー……。じゃあさ、どれも一緒にやったらいんだよ。ぎゅっも、ちゅっも、甘いものもね？」

「……ばかでしょ」

「頭いいと思うけど？　ぬゅふふふ」

ムラサの胸のときどきは鳴りやまない。むしろ悪化する一方だった。

「うっん。ばかよ。だってそれだけで我慢できるはずがないもの」

「み、なみっ……。うああああああ大好き、愛してるっっっっっ
っっっっっっっっっっ」

ぬえとムラサが幸せの鐘を鳴らす日はそう遠くないかもしれない。
バカップルさん、お幸せに。

ハグの効能（前書き）

この二人がいちちゃついで幸せだといいです。あ、ぬえむらが好きです

ハグの効能

「ねえ、ハグしよう！」

「寝ぼけてんのかこの妖獣」

これは、命蓮寺のよくある日常を切り取った話である。

封獣ぬえという少女はどうにもこうにも村紗水蜜のことが好きだった。

寝ても醒めてもムラサ。夢の中でもムラサ。うふふ、あはは。

ねえー待ってよ、待つかこの妖獣、もうムラサったら恥ずかしがりやさんなんだからあ！

ぬえが好物のパフェを出されても3秒だけ悩んでからムラサをとるくらいに好きだった。

いや、この数字はぬえにしては驚異的な数字なのだ。誕生日ケーキのろうそくの火を自分の代わりに吹き消されたとしても。

クリスマスケーキの甘いサンタさんをかじられても。

瞬殺じゃなくて半殺しくらいで許してあげようと思うくらいにムラサのことが好きだった。

寒い冬の日には背中に手をつっこんで暖をとるくらいに。

むき出し魅惑のひざ裏を見るとひざカクンしたくなるくらいに。

料理の中に自分の嫌いなたまねぎがあるとムラサの皿に移動させるくらいに。

手を洗ったらその水滴を顔にぴっぴつと飛ばすくらいに。

いたずらといやがらせが、微妙な信頼関係との上に成り立っている

二人なのである。

え、好きじゃなくない？という問いは野暮である。

正体不明であるぬえは思考そのものも正体不明であり、もはや常人には理解できないレベルなのだ。

「妖獣じゃなくって妖怪だって何回言ったら分かるの」

「私にはあんぽんたんな獣に思えます」

「じゃあ百歩譲ってケモノでいいからハグして！」

「いや、その脈絡はおかしい」

「ちゃんと許可とるだけ紳士だと思わない？」

「思わない。せいぜい淑女」

「うん、女の子だもんね。って論点そこじゃない！！」

台所でムラサが洗い物をしている後ろで、ぬえは椅子に座っていた。いや、座っていると表現するのは語弊があるかもしれない。

「それやめなさい。床も椅子も傷つくから」

「んじゃあハグしてー、ハグハグー！」

椅子に反対向きに座り、背もたれに頼杖をついて、斜めに浮かせては下ろし。また浮かせては下ろし。という遊びを繰り返していた。ぺたん、ぱたんと物悲しく音がたつ。けれど洗い物の水音の方が大きかった。

「ねえってばあー！ こっち来てよー！」

「これ終わったらね」

「もう洗い物ないでしょ？ いつまでやってんの」

「今から掃除するの。水回りはちゃんと綺麗にしておかないと、やつが出るわよ」

「黒い悪魔はいやだあああああ」

「ならもう少し辛抱なさい。冷蔵庫にプリンあるの食べていいから」

ムラサが言うが早いか、ぬえはすつくと立ち上がり冷蔵庫へと直進。開けて、中の3番目の棚にお目当てのものを見つけた。

あまあい黄色と、ちよっぴり大人な焦げ茶の黄金比率。おこさまに大人気のプリンだ。

ぬえの目は恋する乙女のように輝き、とろけた笑顔を浮かべる。

「それ、ほんと私のなんだけどね。あんたがうるさいからあげるわ」

「やったね！ ムラサ大好き！」

「はいはい」

「もちろんプリン抜きでね？」

「……はいはい」

ムラサの手が一瞬止まったのをぬえは見逃さなかった。

「ハグってねーストレス解消にとつてもいいらしいよ」

「私のストレスの最たる要因さんが何をおっしゃるか」

「他にもね、腰痛、肩こり、頭痛、関節痛、神経痛なんかにもいいつて」

「なにその温泉みたいな効果」

「あと金運恋愛運アップして、宝くじ当選とか、恋人もできるってもっばらの噂よ」

「なにその悪徳商法」

「ねえーだからさ、ぎゅうってしようよ。あとで肩揉んであげるし」

「ウチにはただでさえ金運の神さまみたいながいるし。いいわ。

お金なんてなくなっただけ生きていけるし」

プリンは綺麗さっぱり平らげられ、ぬえは残ったカラメルソースを指ですくって舐める作業に移っていた。

「やめなさい、みつともない」

「ムラサシか見てないからいいじゃん」

「あんたは子どもか」

「取り繕わないのでありのままの自分でいるだけだよ」

「あっそうですか」

「ムーラーサアー、構って、ひと肌恋しいの」

「私以外にもいるでしょう」

「やだ。それに？ 他の人とハグなんてしたら怒るくせに」

「……まあね。今日の夕飯は何がいい？」

「からあげ食べたい」

「もうこのままついでに作るわ」

本格的に夕飯の準備にとりかかりはじめた水蜜を見て、ぬえは諦めた。

エプロン似合うなあぬゆふふ、だなんて考えながら、まあ今日じゃなくてもいつかと納得させる。

仕方ないから、金運の神さまをおちよくりにいこうか。それとも夕飯までお昼寝してようかな。

しびしびと席を立つぬえではあるが、後悔の色は見えない。こうやってあしらわれるのは日常茶飯事なのである。

「味噌汁の味見してって」

「それは、私が猫舌なの知ってのいやがらせかしら？」

「私からいやがらせしたっていいでしょう。なんかあんたの舌が聖の求める味に近いみたいなの。光荣だと思いなさいよ？」

「うーい」

ぬえはのたりのたりと歩きながら乗り気でないことを全身でアピールする。

しかし、その先にはエプロンとおたま装備の水蜜がいるから行くのである。

聖のためなんて、ほとんどどうでもいい。ぬえの第一事項はいつだって水蜜なのだ。

ムラサはおたまで汁をすくい、ふーふーと冷ますために息を吹きかける。

ぬえはそうやってるうちに間違えて睡でも入らないかなー、そうだといいのになーと考えながら待っていた。

「しっかり冷ましてね」

「ならいつも以上に冷ましてあげるわよ」

水蜜はおたまの汁を自らの口に含み、ぬえを引き寄せる。

二人は繋がって、しばし無言が訪れた。

油を入れていた鍋が、鶏肉の投入をまだかまだかと待つばかりで、それ以外の音は何もしない。

「おあじは？」

「……みそしるの味がする」

「濃い？薄い？」

「ちょ、うど、いいけど……あまいね」

「じゃあ味噌汁これで完成ってことで。部屋戻ってていいわよ」

「ムラサ」

「ぬえ？」

「ねえ、好きなんだけど」

地底の橋（前書き）

ぬえむらがネタ切れしたので、今回はパルスィのおはなし。緑色の目って可愛いと思うの。ああ、妬ましい、妬ましい。パルパルパルパルパルパルパル……

地底の橋

地底の往来はいつもひっきりなしに、脇目も振らずに歩いてく。橋に佇む人物など視界にも入れず、いや、むしろ意図的に無視して歩いてく。あれは魔性の目だ。緑のばけものだ。目が合ったら、御仕舞い。

地底の橋には姫がいる。

燃えるような赤でなく、澄んだ青でなく、どろりとした深淵の緑。橋姫の眼光はざらりと鋭く、どんなカットを施した宝石よりも輝いてものを見つめていた。彼女の目にはほとんどのものが妬ましく見えた。

今日も今日とて橋に立ち、道行く人々を眺めるだけの簡単なお仕事。橋から遠く離れることは叶わず地上へと繋がる穴を羨望のまなざしで見つめるだけ。ああ、私だって地上に行ってみたい。人に紛れて、人並みに楽しんでみたい。危害を加えるわけでもないのに忌み嫌われるこの眼がうらめしい。普通が妬ましい。他人が妬ましい。世の中全てが妬ましい。

「あなたは毎日ここで なにをしているの？」

「橋の番人として意味もなく突っ立ってるだけよ、ああ妬ましい妬ましい」

「大変ね」

「そうね。あなたは誰？」

「ねえ、おはなし、してもいい？」

黒い帽子をかぶり、スカートをふんわり膨らませた少女がひよっ

こり現れ、にこり尋ねた。

「……ヒマだし、どうぞ？」

「わたしね、お家は大きなお屋敷なの」

「恵まれてるのね、妬ましい。お名前は？」

「うーん……ないしょ。お家はね、ペットがね、たくさんいるの」

「素敵な家じゃないの。妬ましいわ」

互いに目を合わせず、往来を見つめて話す。会話は要領を得ず脱線しつつも一応、成立していた。橋姫は子どもに付き合っただけの感覚で適当に聞き流し、適度なタイミングで相槌を打つ。もちろん「妬ましい」というのを忘れずに。少女との会話は思いのほか長引き、気付けばあたりは夕暮れだった。

「ほら、お家に帰らなくていいの？ さっき言ってたお姉さんが心配するんじゃない？」

「わたし帰っても気づかないもん」

「？」

「ねえまた来てもいい？」

「許可なんて取らなくても私は毎日ここにいるわよ」

「じゃあまた来るね」

そこで初めて橋姫は少女と目を合わせた。自分と同じ緑の目とがち合う。

「わたしとあなた、お揃いなのね」

にこり微笑む少女の顔をまじまじと見つめて立ち尽くす。ハッと気付くと少女はもういなかった。

宣言通り、少女は翌日もやってきた。橋姫は立ち、少女はしゃがんで互いに目を合わせることなく、そして往來を見るでもなしに見つめて会話する。たまに少女が家のことを話すくらいであんまり互いの素性は語らず、当たり前障りのない天気の話や食べ物の話をしていた。

「昨日、どうしてここへ来たのかしら」

「わかんない。気付いたらいたの」

「そう、それは困ったわね」

「こまったね」

また夕暮れがやってきて、橋姫は少女に帰宅を促す。

「さあ帰りなさい。子どもは帰る時間よ」

「えゝもうちよつといたいなあ」

「駄々捏ねる子どもは帰らないとね。さあ、とつととお帰りなさい」

少女は橋姫の裾を掴んで抗議したが聞き入れられることはなかった。仕方なくふわり浮かんでひらひら手を振ってどこかへと飛んでいった。その際に体に巻きつくコードのようなものと青い目玉に初めて気が付いたが、あまり友好関係が広くない橋姫はそれが何か分からなかった。

「あの子は私の眼を見ても何も言わないのね……妬ましいわ」

あくる日も、そのまた次の日も少女はやってきた。おしゃべりをして帰る。その繰り返し。たまーに少女が家から持ってきたというお菓子を食べるくらいで、これといって楽しいことをしていたわけ

ではなかった。なのに帰るのをいつも渋った。

地底にもわずかな季節の変化はある。橋姫と少女のおしゃべりはついに季節を一巡した。

「いつも思うのだけれど。あなた、お家、帰りたくないの？」

「そうかもしれない」

「……家くる？」

「いいの!？」

ほんの気の迷いで少女を招くことにした。夕飯を食べさせてそここの時間に帰せばよいだろう。っていうか、なんで私はこんなに保護者じみたことしてるのかしら。

少女は飛び跳ねるように橋姫のあとに付き従い、橋姫はいつも一人の帰路と違う感覚に慣れず落ち着かない。やけに少女がひつついてくるから、頭を一度ぽりぽり搔いて、いい加減に聞こうと思いい、質問してみた。

「あなた、お名前は？」

「……こいしっていの」

「そう。私はパルスイよ、よろしくね」

「手えつないでもいい？」

「べ、別にいいけ、ど……?」

繋がれた少女の手は小さく、柔らかく、妙にどぎまぎとする。何らしくないことを考えているんだ! と己を叱咤し歩を進めた。橋姫の家は橋からほど近く、粗末でも豪華でも何でもない普通のつくりだった。普通に生活臭があふれていて、普通に暮らしが想像で

きるような家。

「パルスイの家って普通なのね」

「こいしの家はお屋敷だから庶民の暮らしは分からないでしょうけど」

「普通って素敵じゃない」

何気ないこのひとことが、橋姫にはいたく嬉しかったのを少女は理解できないだろう。普通であることの嬉しさ。ばけもの呼ばわりされてきた橋姫が妬み、憧れた『普通』。どうやらこいしには私が普通に見えるらしい。嬉しかった。

「ご飯は何かいい？」

「ハンバーグ！ あとスパゲッティとケチャップライスもあつたら満点よ！」

「少し毛慮しないのね。えーと、材料あつたかしら……」

「お姉ちゃんのハンバーグおいしいんだよ、噛むとじゅわって肉汁が出てきてね、」

「こいしって家帰るのは嫌いなのに、お姉さんのことは好きなのね」「お姉ちゃんの大好きだもん！」

じくりと何か感じたのを、橋姫は無視することにした。嗚呼、妬ましい。

「……どうして要望通りのものが作れてしまうだけの材料があるのかしら。妬ましいわ」

「おお、やるね、パルスイ！」

「じゃあ満点もらえるように頑張って作りますか」

「楽しみにしてるね！」

「適当に座ってていいから」

たまねぎは飴色になるまで炒めて水分を飛ばす。固くなってしま
うので、捏ねる回数はほどほどに。フライパンで表面だけ焼いたら、
あとは水を入れて蒸し焼きで煮込む。その水をトマトソースで代用
すれば、ついでにスパゲッティも同時にできる。煮込む間にもうひ
とつフライパンを用意してケチャップライスを作れば効率よく作業
は進む。

橋姫は一人暮らしで身に付いたスキルを如何なく発揮して手早く
作っていく。せっかくだからコンスープとサラダも作るか、と燃
えてきてしまつてさあ大変。食卓には見事なディナーが並ぶことと
なつた。

「こいしー出来たわよー？」

「……………」

「こいし？」

返事はない。怪訝に思い、居間で待っている少女を覗き込んでみ
る。

「寝てる……………」

天使の寝顔だった。無防備なそのほつぺたをぶにぶに、つつん
してみる。反応はない。顔を近付け、ぐいぐい距離を縮める。あと
少しくつつついてしまつ、という所で我に返つた橋姫は動きを止め
た。何やつてるの自分、ああ、でもこいしが可愛すぎて妬ましいか
らね。仕方ないわ。その時少女は目覚め、はたと目が合う。

「ん〜にやむにやむ。わたし寝ちゃつてた？」

「ええ、そうよ。ほら夕飯出来たんだからあつたかいうちに食べる
ましよ。」

「んー……。やっぱりパルスイの目つてきれいだね。いつまでも見てたくなっちゃうや」

しばし沈黙があった。固まる橋姫と、微笑む少女。

「寝めてもデザートにゼリー追加くらいしか無いわよ?」

「え、ゼリー好き好き!!」

夕飯を食べ終えた。デザートはゼリーも食べた。少女の食べ方が思った以上に綺麗だったので驚いてしまったほどだ。さて、どうやってこの家出少女を帰したのか。

「ねえ泊まつてたらだめ?」

「駄目。お姉さんが心配するでしょ」

「えーだつてー!」

「えーも、だつても無いわよ」

「むうー!」

「むくれても駄目なモンはだめ!」

「逆に考えて。こんな時間に帰ったらあぶないよ?」

それは考えてなかったわとうなだれる橋姫をよそに少女ははしゃぐ。着替えをどうするかとか、家へどうやって連絡するかとか。考えることはたくさんあったが眠そうな少女を見てまずすべきことが決まった。お風呂に入ってもらわなければ。

「よおし、じゃあ仕方なく泊まるのを許可するわ。だからお風呂入ってきなさい。あつちだから」

「パルスイも一緒に入ろうよ」

「絶対に、い・や!」

「えー!。ん〜じゃあ後で一緒に寝てよ」

「ちゃんとお風呂入ってくるならいいわよ」

「きゃー!」

もぎゅ。

「ねえこいし、ひつつきすぎよ」

「だって布団ちっさいんだもの」

「悪かったわねえ……」

風呂上りの少女はたいそう可愛らしく、橋姫はまた妙な感覚になつてしまった。銀色つばい髪は自分の髪にはない美しさがあったし、同じシャンプーを使ったはずなのに、すごくいい匂いがしていた。

「こいし。聞きたいことあるんだけど、いいかしら?」

「うん。どうぞー」

「あなたの名字、もしかしなくとも『古明地』だったりするの?」

「……なんだ、知ってたんだ」

「あなたがお風呂に入ってるときにずっと考えてたのよ。地底の管理者とその妹くらい、さすがの私でも知ってるわ」

少女はコードをたぐりよせ、青い目玉を指さした。橋姫は何も言わずにそれを見つめる。合わせて4つの緑目が青い目玉を見つめた。

「わたしね、覚なの。まあ心は読めないんだけどね。パルスイは何にも聞いてこなかったから助かったなあ」

「そう。私は橋姫なの。あなた嫉妬は怖くない?」

「心読めちゃうのに比べたらでんで可愛いモンだと思っよ?」
「心読めない覺なんて怖くもなんともないわよ?」

少女は橋姫のおでこに自らのおでこをくつつける。

「みんな心ではどんなことを思ってるか分からないの。でもってそれを隠して生きていくから嘘と建前ばかりの世の中なのよ。でも、あなたは包み隠さずに言ってくれからラクちゃんよ。だってね。どこが悪いか、とか言ってくれないと直しようがないのに、勝手に嫌っていつたりするの。もう疲れちゃった」

「私、妬ましいばかりぶつぶつ言ってると思っけど?」

「えーだって、不必要に傷つけることは何一つ言っでないでしょう?」

「そう、かしら……」

「うん。それにこうやって私が『古明地こいし』って知っても変わらず接してくれるし。ふへへ」

「別に、あなたが誰でも、何でも、あなたはあなたでしょうが」

「パルスィは優しいね。うくん……なんかね、わたし、あなたのこと好きになっちゃったかもしれないの」

どうしてこの少女はこうも自分の欲しい言葉をくれるのか。妬ましい、妬ましい。布団が小さいのは事実。せっかくだからもう少し近づいておこうか。

「そう。じゃあ……。また明日来れば?」

「いいの!?!」

「お姉さんにちゃんと断り入れること。いいかしら?」

「うん!」

「よしよし。いこうね」

少女こいしは、橋姫パルスィに渾身の抱擁をした。むぎゆうとしがみついて頭をぐりぐりこすりつける。それは二人の金銀の髪が交差して見事な情景だった。

地底の往来はいつもひっきりなしに、脇目も振らずに歩いてく。橋に佇む人物など視界にも入れない。

だけれど極まれに、緑目が4つあることに気が付く人がいたりするのである。

そう、地底の橋には姫と少女がいる。

にとりは意外とぶきっちなようです(前書き)

友人からネタ提供されたので。にと雛は可愛いと思います。

にとりは意外とぶきつちよなようです

春の陽射しにやられてぼかぼか頭。さらりと吹く春風に落ち着かないうずうず心。

ゆったりと河は流れて春の匂いがしてなんだか幸せだなんて思う春うらら。

私は草っぱらで一生懸命に草冠を作っていた。

白詰草を編んで織り込んで輪っかを作る。

機械いじりは得意だ。設計ミスがあつたら数値を計算し直して調整するし、必要な道具がなければまずは道具から作る。

メンテナンスも調節も独創性溢れる設計図も全部ひとりで作れる。なのに何でだろう。ただの草相手に私は苦戦していた。

爪と爪の間に草の汁が染み込んで茶色に汚れる。

オイル汚れとは全然違うからべたつかないし簡単に落ちそうなんだけど、ぶきつちよみたいで嫌だ。

植物で長さがまばらだから端々がびよんびよん跳ねてうまく編み込めない。

そもそも綺麗な真円に形作ることができなくて歪な丸を描く。

私はひとりで何でも作れるエンジニアなのに……。

「にとり、できないの？ 手伝いましょうか？」

「ううん、自分でできる！ー！」

やだやだ。私は作れるよ。一人で作れるよ。

それにこれはあげるやつなんだから手伝ってもらったら意味ないんだから。

私はなるべく長さが均一な白詰草を集めてもいっぺんはじめから編み直した。

まずは引っ掛かりを作ってそれを連ねて続けて織り込んで入れて絡ませて……………

あ、これちよっと形違うけど長さぴったりだから入れとこう。

旋盤は数値を入力して綺麗な真円を削り出すことができる。でも手編みの草冠はそうはいきそうになかった。

おにぎりひとつ握るのも綺麗は正三角形にできない私だから当たり前なのかもしれないけど。

細胞壁が折れてしまって、くったり黒ずんだ茎が教えてくれた。

隣にいる彼女を見やる。人を手伝う余裕があるほどなんだから手早く綺麗な草冠を作ってるんだろう。

雛の手は魔法の手みたいだった。

無理に曲げたり折ったりすることはなく、植物元来の歪みを利用して自然に最低限でしならせる。

長さ違いのをうまく組み合わせてかつちり輪の中に収める。切れっ端が跳ねることもなく、ちゃんと落ち着く。

計算なんてしてないのにどうしてあんなに美しい真円が作れるんだろう。

微妙に開いている隙間に他の種類の小さな花を編み込んでいて、私の白と緑だけのと違って随分と華やかだった。

なめらかな手つきでしなやかに動かす指を眺めてしまう。

雛は綺麗だ。斜め下を向いてちよっと微笑んで作業していた。

こっち向いてくれないかなあ。

長いまつげが揺れて少しずつ瞳を開いてそして私とぱっちり目が合った。

うん。やっぱり雛は綺麗だ。でもって可愛い。

ああああああ………見てたの雛に見られた!!!!!!

「にとり………どうかしたの?」

「ひゅいつ!?!」

反動で持ってた草冠をぎゅっと引っ張ってしまつ。そしたらぶつちんって音がした。

異常音がしたら直ちに作業中止で点検しないといけない。

ただ点検するまでもなく私の草冠は千切れてしまっていた。

「あああああ………雛、千切れちゃった……」

ちょんぎれてしまった茎。接着剤持ってるけどそんなの反則だ。

図面書いていいかな……長さ計算して計画的に作れば私だって……!!

「にとり、あなた神経質に完璧に作りすぎよ。

植物だもの、いつこいつこ違うんだから綺麗に作れなくても当然なのよ」

「でも雛は綺麗にできてるじゃんか」

「私は………ひとりで遊ぶことが多かったから自然と上達しちゃった

だけ」

みっともない、みじめで情けない気持ちになる。雛はできるのに私はできない。これあげる。って言ったってこんなんじゃ雛、喜ぶどころか迷惑だよ……。

何でも作れる技術屋、エンジニア。なのに河童のにとりは草冠も作れないぶきつちよ河童……そんなの嫌だ。

「にとり、貸して？」

「うん……」

ちよつと泣きそうになって目をごしって誤魔化しながら雛に渡す。そしたら雛はにこにこしながら、はい、って作った冠を被せてくれた。

大きさもぴったりで本当に雛はすごいなあって。そう思ったんだ。

「私、リボン邪魔だから」

しゆるしゆるってリボンを抜いて私の草冠とうまく縛って形を作る。ふあさつ……って緑の髪が広がった。

慣れたような手つきで魔法みたいに綺麗な形になって千切れたところも修復できた。

ほら、って渡されて。ははーん。被せて欲しいのね。

「はい、どうぞ。私のお姫様」

被せて、ありがとうってはにかんだ笑顔が堪らなく可愛かった。

一本だけ中途半端に飛び出している白詰草があったから引っっこ抜いた。

あ、これは長さぴったりだから入れたやつなのに結局飛び出しちゃったなあ……。

「にとり、にとり。それちょうだい」

「なんで？ 飛び出してたから取っちゃったよ」

「本に挟むわ」

雛がずいといと近寄ってきてそのまま押し倒されるみたいに抱きしめられた。

でもってちゅーって唇を奪われた。持ってた白詰草ごと。

「これ四つ葉のクローバーなもの」

あんまりにも雛が幸せそうに笑うもんだからつられて笑って二人で抱き合って転げ回って。

せつかく被せた互いの冠も落つことしちゃって髪ぐしゃぐしゃになつてたけど。

「雛大好き!!」

「私もよ、にとり」

四つ葉のクローバーって本当なんだなって私は思ったのでした。

紅に惹かれて（前書き）

ぬえが白無垢を着たいがために命蓮寺メンバーを巻き込む大騒動のお話です

紅に惹かれて

幻想郷のとある昼下がり。村のあるところから怒鳴り声が聞こえてきた。

「もうー！何で私がこんなことしなきゃいけないのよー！」

と、黒いワンピースを着た少女は空を浮きつつ、愚痴を漏らした。

「そうは言っても、ぬえはいつもお寺の掃除や行事の手伝いはしないのに、ご飯の時だけはちゃんと来るんだからご飯の調達くらい手伝ってくれてもいいんじゃない？働かざるもの食うべからずっていうでしょう？」

と、水兵のようなセーラー服を着た少女が愚痴をいう少女をなだめるように言う。

愚痴を言っている少女は納得できず、ずっと愚痴を言っているが、その手にはしっかりと買い物袋を握り、落とさないようにしていた。そこがどこか微笑ましく見えた。

少女たちは村の近くにできた命蓮寺に住む妖怪たちで黒いワンピースを着た子は『封獣ぬえ』といい、もう片方の水兵のセーラー服を着た少女は『村紗水蜜』という。

彼女たちはよく村へ買い出しに来ることもあり、今回は村へ降りてきたのは食料の調達が目的のようであった。

二人並んで歩いているとふと、ぬえは愚痴をいうのをやめ、あると

ころをじつと見ている。

村紗もぬえにあわせるように止まり、ぬえの視線の先を追った。

視線の先では披露宴が行われており、新たな新郎と新婦の門出を祝っている最中であつた。

「結婚かー。いいなー私も生きてたら好きな男の人と結婚してたのかなー。それに新婦の着ている白無垢綺麗だなあ・・・ねえ、どう思う？ぬえ」と、村紗はあっけらかんに言ったが、ぬえは聞いていなかったみたいで、なにかに食い入るようにして披露宴の様子をみていた。

「ぬえ？どうしたの？」

ぬえの様子がおかしいと思つた村紗はぬえに何度か呼び掛けるがなにも反応しない。

改めて呼び掛けるとふえ？とぬえは気のぬけたような声でやっと呼び掛けに反応した。

「もうーぬえ、一体どうしちゃつたの？」と村紗は少し心配したようにぬえに話しかけた。

ぬえは「ごめんね」と村紗にいい、改めて披露宴の様子をみていた。

しばらくして、村紗はぬえに呼びかけられ、あの新婦が着ているのってなんていうのー？と聞かれた。村紗は白無垢っていうんだよーと教えてあげると、そっかー。とぬえが返事を返し、また新婦のほうをみていた。

白無垢に興味を持ったと思った村紗はあれー？ぬえちゃんも白無垢が着たいのかなー？んー？とからかうと、ぬえは顔を真っ赤にして必死に否定した。

そして二人は命蓮寺へと帰っていった。

その日からぬえの様子がおかしくなった。いつも命蓮寺のだけれかにいたずらをするのを日課としていたが、いたずらをする回数が減った。それどころかいたずらをしなくなった。いつもおいしそうに食事をしていたが、最近ではなかなか食が進まないらしく、日に食べる量が減っていった。そして、一人でいるとなにかを考えるようになったり、一日中ぼっぼっとしていてる時が多くなった。

ぬえの様子がおかしいと感じ、心配になった聖は村紗や一輪、星やナズーリンを呼び、相談をすることにした。

「最近、ぬえが考え事をするようになったのですが、だれか知りませんか？深く考えすぎて心病まなければいいのですが・・・」と、聖はぬえのことを案じていた。

星はまたなにか悪いことを企んでいるのでしようと言ったが、ナズーリンにご主人と呼び、肘で星の脇腹を突いた。脇腹を突かれたことで誤った発言をしてしまったと気付いた星は、自分が言ったことを理解し、しよぼくれてしまった。

一輪もぬえの様子が変わった原因を考えてはいるものの心当たりがなさそうであった。皆がしばらく静かに黙っていると、村紗が沈黙を破った。「私、心当たりがあるかもしれない。」

それを聞いた聖は本当ですか村紗！と、聖は村紗に食いつかんばかりに迫った。う、うんと村紗は聖の急な接近に驚きはするがうなずき、ある日の出来事を話し始めた。

「ある日、私とぬえが村へ買い出しに行ったとき、村で披露宴が行われていたの。ちょうど私たちはその披露宴の新郎新婦を見ることのできたんだけど、その時、ぬえはその様子を食い入るようにみていたの。すごく集中してみている、私が何度呼びかけても反応しないくらいみていたの。それで急にあの新婦さんが着てるのは何？って聞かれたから白無垢だよ綺麗だよなーって話したらふーんていつて、また披露宴のほうを見ていたの。・・・そういえばあの日からなんかぬえの様子がおかしくなった気がするなー」と、村紗が言った。

聖は村紗のその話を聞き、ぬえが披露宴を・・・ですか。となんともいえないな表情を浮かべた。

村紗の話を聞いた命蓮寺の面々も聖同様に不思議に思った。

それはそうである。なぜならば、あの「ぬえ」が披露宴もしくは白無垢というものに興味を示したからである。

三度の飯も好きだがいたずらも大好きというぬえが恋に興味を示したのが意外だ、と皆思ったからである。

聖も思わず「あのぬえが・・・ねえ」と無意識につぶやいてしまうほど聖の中では意外であつたらしい。

なにはともあれ、相談したことにより、今ぬえが悩んでいることについて聖は把握できたらしく、聖の顔からは緊張が和らぎ、いつも

の笑顔に戻り、もうしばらくぬえの様子を見守るという結論に至った。命蓮寺の皆も聖の意向に賛成した。

そして数日後、命蓮寺の面々で食事をしているときのことであった。命蓮寺のメンバーと食事を食べていると、ぬえは箸を休めて口を開いた。

「あの・・・ね・・・ひじり。」

ぬえの突然の呼び掛けに聖は少し驚きつつも、「どうしたのぬえ？」と言葉を返した。

ぬえは数度口を開いては閉じを繰り返した。聖はそのぬえの様子をみて、なにかをいいたそうにしているのだと思い、手に持っていた箸を食卓に置き、ぬえの言葉が出るのを待った。

しばらくしてぬえは恥ずかしがりつつも言葉をつづけた。

「私ね・・・白無垢っていう服・・・を着たいの・・・。」言った直後、聖とほかの面々は固まった。

ぬえの言った内容に理解が追いつかないといった様子であった。

思わず、聖はぬえに聞き返してしまった。

「ぬ、ぬえ。今なんていったの？」と、少し焦ったように聖は言った。

「だから・・・ね。私・・・白無垢を着てみたいの！！」と顔を赤らめつつぬえは言った。言い切った直後、ぬえは元から赤くした顔

をさらに赤くさせ、耳まで赤くさせた。

聖はというと固まってしまった。

笑顔顔を顔に張り付けたまま。数分経ったであろうか、聖の意識は無事に帰ってきた。

「ご、ごめんなさいねぬえ、せつかくがんばって言うてくれたのに黙ってしまって。それで！相手はだれなの！？もう思いは伝えたの！？」と、聖は興奮したまま巻くりたてるようにぬえに言った。

この発言に今度はぬえやほかの面々も戸惑った。村紗や一輪たちは聖の変貌に驚いていたが、ぬえはきょとんとした顔で聖に聞き直した。

「ひじりー。相手ってなに？」

というぬえの質問に聖は「相手っていうのは恋人のことよ。恋人。しかも白無垢を着たいってことはだれかに添い遂げたいってことでしよう！？ねえぬえ、聞かせてよ」と聖はさらにぬえに詰め寄りつつ言った。

ぬえはそんな聖の様子をみて驚いた。

しかし、ぬえはなぜか目を泳がせて、こういった。「ええとと・・・その・・・相手は・・・ええとと・・・」とさまざまな方向に目を泳がせていた。

壁や屋根あらゆるところに目を泳がせ、その先に村紗がいて目が合
い、ぬえはこう言った。

「相手は・・・相手は・・・相手はそう！！村紗！！」

「えっ!？」村紗はものすごい勢いでぬえのほうに振り向いた。だれもがどういふ状況かわからないからだ。

聖たちはぬえはいつの間にか人間もしくは妖怪に好きな人ができ、その人と恋仲となり、互いに将来を誓い合った。そして、その人のために白無垢を着たいのだと思っていた。

しかし、ぬえの言葉からは、その相手とは村紗であり、ぬえは女性同士の結婚がしたいと言ったのである。これには聖や一輪達は頭を悩ませた。

しかし、聖はほかでもないぬえのためであり、ぬえが恥を惜しんで皆の前で言ってくれたことを考え、深呼吸をし、改めてぬえに質問した。

「ぬえ、あなたは村紗のために白無垢を着たいのね？」聖はぬえの目を見据えて聞いた。

さきほどまで興奮していたのがまるで嘘のように聖の眼はまっすぐぬえを見据え、ぬえが答えるのを待っている。

ぬえはう、うんとはっきりしない返事を返したが、ぬえは返事をしたのだ。

返事をした。

これはまぎれもなく事実なのだ。

聖はその返事を聞き、ふうとため息をし、「わかりました。私はあなたたちを祝福します。」

直後、異論が星や一輪達から出たが、聖はその声を制した。

「いいですか？星、ナズーリン、一輪。これもまた一つの愛の形なのです。素晴らしいことではないですか。まして自分たちの仲間たち同士が愛に至ったのですよ。私たちが理解してあげずしてどうしますか。」と逆に諫めた。

これを聞き、星と一輪達は納得まではいかぬものの聖の言ったことに賛同した。

「ぬえ、村紗。あなたたちの門出を祝うために婚礼の儀をあげます。ただし、条件があります。」と、聖は村紗とぬえに条件を提示した。

聖がいう条件とは「いまだ妖怪と人間との異種間婚約が認められていないのに、同性同士での婚約を認められるのは難しい。したがって、村紗とぬえの婚礼の儀はいつか来たるであろう人間と妖怪同士の婚約を想定した予行練習に見立てておこなう」と、いうことであつた。

二人の一生を思い、ちゃんとした婚礼の儀を挙げさせてあげたいとは思つのですが、今はまだ常識を破ることはできない。これが精一杯なのです、わかってもらえますか。と、聖はつらそうに涙ぐみつつ村紗とぬえに言った。

ぬえは「白無垢が着ればなんでもいいよ！！ありがとうひじり！」とともうれしそうであつたが、村紗は終始浮かない顔をしていた。

村紗とぬえの婚礼の儀翌日。村紗ははまだ状況が飲みこめず、浮かない顔をしていた。どうしてこうなったのだろうか？そんな思いのまま、あのぬえの告白から今日まで過ごしてきた。

聖はまるで母のようにぬえのために幻想郷の村という村を渡り歩き、婚礼の儀に用いる品を集めて回った。

一輪も今回の儀の参加者をなるべく多く集めるために何日にも渡り、ちらしなどを持って村で宣伝してくれた。星やナズーリンも多方に渡りさまざまな手伝いをしていた。

そんな仲間たちの様子をみて、私は今回の婚礼の儀は乗り気ではない、などということができず、今日に至ったのであった。

ぬえよりはやく婚礼の儀のための袴に着替え終わった村紗は、ぬえの白無垢の着つけが終わるのを待っていた。

唐突な告白から今日にいたるまでのぬえの様子はというと、白無垢を着るために聖とともに色々なところへ飛び渡ってはお気に入り、白無垢を探してきた。普段しない手伝いも率先してこなしていた。

村紗はそんなぬえを見て気付いた。いつもどこか不満げであったり、目を吊り上げていた彼女の表情がずっと笑顔でいたことを。笑顔が張り付いている、そんな表現があてはまるほどぬえは今までみたことがないほど笑顔で過ごしていたのだ。

そんなぬえを裏切ることには村紗は「できるわけないよなあ・・・」と思わずつぶやいてしまった。はあ・・・と深いため息をつきつつ、額に手をあてていると、部屋の奥から一輪が現れ、ぬえの着つけが

おわったことを知らせてくれた。

村紗は腰を重そうにしたまま立ちあがって、一輪とすれ違つと、すれ違いざまに一輪に肩を、ポンと叩かれ、ちゃんとぬえに綺麗だよつていつてあげなさいよ、と言つた。一輪もノリノリなんだなあ、と思いつつ、村紗はぬえの元へ向かつた。

襖を何枚か抜けた先にぬえの着付けをする部屋があつた。村紗はその部屋の前に止まつた。

「ぬえー。着つけ終わつて聞いたから入るよー。」と、言い、部屋に入ると村紗は自分の目を疑つた。自分の前にいる白無垢を着た女性性は静かに椅子に腰かけている。まつ毛や目に化粧が施され、唇は熟れた果実のように赤く塗られており、純白の白無垢を身にまとっている。いつも反るように跳ねていたあのクセつ毛であつた後ろ髪は綺麗に整えられ、かんざしでとめられている。これが本当にあのぬえなのだろうか。そう思つた村紗は思わず訊ねてしまつた。

「あの・・・ぬえ・・・封獣ぬえさん・・・ですか？」しどろもどろしつと、目の前の女性に名前を伺つと目の前の女性からはいつもの返事が返つてきた。赤く塗られた唇から出た声はいつも聞いていた馴れ親しんだあのぬえの声であつた。

しかし、この落ち着いた声はなんだろうか。声は澄んでおり、いつもより高めに聞こえる。本当にあのぬえなのだろうか、いつもとは違うぬえの様子に驚きを隠せず、焦る村紗をみて、ぬえはとうとう笑い出してしまつた。

「ぶぶぶぶ、あはは、あははははは！村紗つたらおかしいーの！ー！」心底おかしく思つたらしくぬえは笑いをこらえ切れなくなり、しば

らく笑っていた。村紗はそんなぬえの様子を見て、いつものぬえだと認識することができた。

しばらくするとぬえは椅子から立ち、村紗に白無垢を見せた。「どう？村紗。私似合ってるかなあ。」動きづらそうであるがその場で一回転を試みさせた。

村紗はそんなぬえを見て「ああ、よく似合ってる。綺麗だよぬえ。」と、自分でも無意識にいったらしく、思わず照れてしまった。そんな村紗の感想を聞き、ぬえも恥ずかしくつつ頬笑み、「ありがとう」と、唇から齒をのぞかせ、満面の笑顔で言った。

村紗はそのぬえの満面の笑顔を見て、今まで重く感じていた足取りが軽くなり、村紗自身も今回の婚礼の儀に対する意欲が向いてきた。ぬえのこの笑顔が毎日見れるのなら、そんな悪くないんじゃないかな。そんな気持ちを持つようになった。

じゃあいこつかと村紗が手を差し出すと、ぬえはそつと村紗の手に手を乗せて、披露宴の会場へ並んで歩きだした。

婚礼の儀が始まり、さまざまな人が訪れた。いつもお世話になっている人達、幻想郷の素敵な巫女、魔法使い、妖怪の山の神社にいる三神、永遠亭の一面その他大勢の人物が婚礼の儀という幻想郷では珍しい行事を見学しに来た。

今回の婚礼の儀は表向きには模擬的な意味合いで行われている。それでも一輪の宣伝の効果もあって、多くの人が訪ねてくれた。今までお世話になっている幻想郷の村の人たちや命蓮寺に教えを乞い来る妖怪たち。互いにこわがりつつは

あれど婚礼の儀に興味があり、村紗とぬえを見に来てくれた。

そんな中でこの式に感化され、互いに話をしたり、自身の恋の話や将来の話をする人たちもいた。この事実は村紗やぬえ、聖、その他の命蓮寺の面々にはうれしかったのだ。聖に至っては儀の最中に涙を流すこともあった。

そんな聖を見てもらい泣きをする人もいた。聖にとって人間と妖怪が互いに歩み寄り、互いの経験などを話しているその様子がなにより嬉しかったようであった。

過去にできなかったことの達成感、自分の仲間同士の愛が芽生えたこと、今日一日で聖はさまざまなかげがえのないものを手に入れ、感きわまってしまったようであった。

ほかにも色々な出来事もあったが、無事、命蓮寺の模範的におこなわれた婚礼の儀は終わりを告げた。

婚礼の儀が終わったあと、村紗とぬえは、ぬえが白無垢の着付けをおこなった部屋にいた。

ぬえはいつもどおりの様子に戻り、あー疲れたやこの服重すぎーなどと愚痴を漏らしている。そんな様子を見て村紗は微笑ましく見ている。その視線に気づいたぬえはなによー！と村紗に言ってきた。

それを聞いた村紗は、「いや、ここ何日かいろんなことが慌ただしかったし、色々飲みこめないこともあって大変だったけど、いざ終わってみるとそんなに悪くなかったなあ……って思ってたね。」と、村紗は返事を返した。

「今回の婚礼の儀のこと？」とぬえが聞くと、うんと村紗はうなず

いた。

村紗はそのまま「これからいろんなこと、大変なこともあるだろうけどよろしくねぬえ」と言葉をつなげた。

ぬえは「うん・・・」と村紗へ言葉を返したがどこか晴れない様子であった。

そんなぬえの表情をみてどうかした？ぬえと村紗は声を掛けた。

しばらくして、ぬえは重い口を開いた。

「村紗・・・ごめんなさい。」

村紗は理解できなかった。

なにがごめんなさいなのだろうか、

もしや今言った今後とも

よろしくねという言葉が否定されたのだろうか

それともほかの何かに対して謝罪をしたのだろうか。

村紗はぬえが言った言葉の意味が理解できなかったため、ぬえに「なにが・・・」ととても重く感じる口をなんとか開け、ぬえに聞き直すことができた。

もしも。もしも、今後ともよろしくという言葉が否定されたのであれば、今回の婚礼の儀はなんのために行われたのか

村紗は眼前が暗くなり、急に脱力していくのを感じた。

しかし、なんとか消えかけた意識を持ちこたえさせ、改めてぬえに「どうして……」と村紗は聞いた。

ぬえはその村紗の様子をみて、怖がるように震え、口を開きこうい

「私ね……赤い色が好きなの……。それでね、村紗と村へ買い出しに行つたあの日見た披露宴でね、お嫁さんの唇の赤がすごく好きだったの。今まで見たどんな赤よりも鮮やかで綺麗で……。本当に今までみたどの赤色よりも綺麗だと思つたの。それで思つたの、あの赤をどうすれば手に入れられるのかって……。それで何日も何日も悩んでみてもわからなくて……。何度か村へ足を運んでみたけどこの店にもないし、あの式が開かれるのを待つてみても一向にまた開かれる様子もなくて……。それでみんなに聞いてみようと思つて聞いてみたら、結婚しないとあの赤色はつけられないって聞かされて……。でもどうしても……。どうしてもあの口紅が……。あの赤色を手にいれたくて……。それで……。」

ぬえの口から出た言葉が信じられなかった。ぬえは私が好きで白無垢が着たのではなくて白無垢を着る時につける口紅をつけたかった、ただそれだけであつたのだつた。

そう、私という存在はぬえにとって必要とされていなかったのだ。

私はぬえに愛されていなかったのだ。

村紗はそう思い、かなしいという気持ちとなにか堕ちていく感覚に陥ってしまった。

過去に経験したであろう水底へと沈んでいく感覚。あの感覚を今一度味わってしまった。

それでもなんとかぬえに言葉を返そうと村紗は「そっか……。」と言った。心底がっかりしたようであった。

ぬえもその村紗の気持ちを理解はしたものの、話を続けた。

「でもね、白無垢の着つけが終わって、村紗が私を見て綺麗だよって言うてくれて本当にうれしかった。婚礼の儀のときも私だけずっどと見てくれてうれしかった。ほかのみんなも嬉しそうに笑って、泣いて……。それにね、この部屋に来てから村紗が私にずっと一緒にいようねっていつてくれて本当に……。本当にうれしかったの。だから私、村紗には本当のこと話さなきゃと思って……。それで……。それでね……。」

と、ぬえの目から涙が流れてしまった。涙を流しつつ言葉を紡ぐぬえを黙らせようと思い、村紗はぬえを抱きしめた。もう、なにも聞きたくなかった。

そんな拒否反応のように村紗はぬえを抱きしめた。ぬえは抱きしめられる瞬間、ビクッとまるで怖がるかのような仕草をしたが、それも一瞬で、すぐに抱き締めることができた。

抱きしめているときもぬえの告白は続いた。

「ほんとうにうれしかったの。今までいたずらばかりしていた私に

みんな優しくしてくれて……。今日もいろんな人が来て、おめでとう、お似合いだよ、綺麗だよ、そんな言葉をかけてくれたの。今までこんなに言葉を掛けてもらったことがなくて私すごくうれしかったの。」

それを聞いて村紗はあの突然の告白から今日にいたるまでぬえがずっと笑顔でいた理由が分かった気がした。

今まで命蓮寺の面々以外に振り向いてもらえなかったぬえが今回の件でいろんな人に声を掛けてもらって、祝われて、褒められて、うれしかったんだと。

今まで体験したことの中からことを体験して、戸惑いもしたけど、嬉しさのあまり気持ちが舞い上がってしまったのだ。村紗はそう思った。

そう、ぬえは嬉しかったのだ。

今までのことが、出来事が、経験が。ぬえもまた、村紗同様に白無垢を着るためだけの婚礼の儀について乗り気ではなかったが命蓮寺の面々ががんばっている姿をみて、悪い気がしなくなったのだと。

まして、いつも邪見にあしらわれていた村の人々から祝福され、喜んでいたので。ぬえの話冷静に聞くことができた村紗は事情を理解した。

さっきまで感じていた脱力感はなくなり、普通の状態にもどることができた。そしてそっとぬえの頭をなでつつ、しっかりと抱きしめてあげた。

またぬえはビクついたが、頭を撫でられるとぬえはさらに泣き出し、ごめんなさい・・・ごめんなさい・・・と泣きながら、村紗に何度も何度も謝っていた。何度謝っても謝りきれない。そんな思いを抱えていたのだろう。

しばらく村紗の胸の中で泣いたあとも、ぬえの言葉は続いた。「でもね・・・私、村紗も好きだよ・・・。」突然の告白に村紗は戸惑った。

それでもぬえの言葉は続く。「だってどんなときでも一緒にいてくれるし、笑ってふざけてくれるのも村紗だし。みんなの前で白無垢を着たいって言ったときも咄嗟に村紗っていつちゃったけど、いまでも村紗って言うと思う。」

村紗はぬえの告白を黙って聞いていた。ぬえが真剣な目でこちらをみつめ、しゃべっているからである。

ぬえはいつも落ち着かないようにしてしゃべるのがクセになっているのだが、今はじつと立ち、真面目にこちらを見つめてしゃべっているのだ。

そんなぬえの様子を察して、村紗もぬえの真剣さを受け止めて聞いていた。

「ねえ・・・村紗は？村紗はこんな私でも受け止めてくれる・・・？」とぬえは村紗に言った。

村紗もぬえの真剣さに答えようとした。しかし、うまく答えをいうことができない。

「私は・・・」なんとか言葉を紡ぎだしてみるものの口をつぐんでしまう。何とかこたえたい。こたえなければいけない。そう思い、村紗は「ぬえあのね!!」といった瞬間、

「なーんてね、冗談だよ村紗」とぬえは笑いつつ、言った。

へ？と村紗は間の抜けた声を出してしまった。「だって私たち女同士だよ？ばかだなあ」と、ぬえは続けて言った。

そんなぬえの言葉を聞き、村紗は拍子抜けしてしまった。真面目に、本当に真面目に考えて答えようとしたのになあと、村紗はふてくされてしまった。

ふてくされた村紗を脇目にぬえは「さあ、こんな重い着物ぱつぱと脱いじゃおうよ。片っ苦しくて仕方がないわ!」と、パツと白無垢を脱ぎ出した。一気に脱いしまったことにより、ぬえの肌が露わになってしまった。

それを見た村紗は「私が部屋でてから脱げよばか!!」と言い、怒ったようにして部屋を出ようとした。

しかし、なにか背中から抱きつかれて、歩けなくなってしまった。抱きついてきたのはぬえであった。まだなにも着ていない生まれたままの姿の。

「ば、ばか!!はやくいつもの服着なさいよ!!風邪ひくよ!!!」と、慌てつつもぬえの身を案じる村紗だが、ぬえは離れようとはしなかった。

目を閉じ、そっと村紗の身体を抱きしめていた。村紗が暴れるのを

やめるとぬえは「村紗・・・ごめんね・・・あと、ありがとう・・・」と言った。

村紗は背中からまわされたぬえの手にそつと手を添え、うんとうなずいた。

このとき、村紗は背中ごしに感じるぬえの体から伝わる熱は熱く、胸の鼓動が強いと感じるほど鼓動していたことをよく覚えている。

婚礼の儀が終わった後も、ぬえのご機嫌はよいままであった。

なぜぬえの機嫌がよいのかというと、それは欲しかった婚礼の儀に使われる口紅を手に入れることができたからである。また、婚礼の儀に使われる口紅はある草や果実を用いて作られる染料で、その染料職人に欲しいといえば材料があるときにあげますよ、と言われたのである。

それを聞いた村紗とぬえはなんともいえない表情をしていたが、あの婚礼の儀をあげられたこともよい思い出の一つと割り切り、聖たちには伝えず、お互いの秘密にすることにした。

ぬえは終始ご機嫌で、暇をみてはその口紅の赤色を眺め、時には自分でその口紅で塗って、遊ぶこともあった。

人々はそんなぬえをみて、白無垢を着てさぞうれしかったのだろう、と思う人もいれば、婚礼の儀でぬえの相方をしたあの少女と婚礼の儀をあげたことがうれしかったのだらうと思う人もいたそうだ。

しかし、ぬえの本当の考えを知っている人物は村紗だけであり、うすうす気づいてそんな命蓮寺の面々は今でもぬえが村紗と婚約でき

たことを言んでいると思っっている。

そんなさまざまな感想を持たれている中、村紗は婚礼の儀のときのままの感想を持っていた。ぬえが喜んでくれたらそれでいい、あの笑顔が見れるのであればそれだけでいい・・・という感想をである。

ずっと嬉しそうにしているぬえを遠くから微笑ましくみていると、その視線に気づいたらしく、ぬえが村紗のもとへ近づいてきた。

口紅が塗られたぬえの唇はいつも以上に赤く、ぬえの白く透き通るような肌の白さと合い、村紗はその鮮やかな赤い唇とぬえの肌に色気を感じた。

そう感じた村紗はぬえに動揺したことを気付かれまいと平静を装うとしたが時すでに遅く、ぬえに見抜かれてしまっていた。

「あれー村紗どうしたのー？顔がちよつと赤いよー」と正面から顔を近づかれ、さらにその色気のある唇をみることになり、村紗はさらに恥ずかしくなり、顔を赤くした。

そんな村紗をみて、ぬえはおかしく思い、笑った。村紗も恥ずかしながらも釣られて笑ってしまった。しばらく笑ったあと、ぬえはまた村紗の元を離れた。

また遊びに行つたんだなと思つた村紗はきびすを返して歩き出すと横からなにかに抱きつかれた。抱きついてきたのはぬえであり、ぬえだと気付いた直後、頬になにかがあたつた感触がした。その感触というのはぬえが村紗の頬にキスをした感触であった。

ぬえは村紗の頬にキスをしたあと恥ずかしそうにし、しばらくしてから「村紗・・・ありがとうね!!」と満面の笑みで言った。

村紗はそんなぬえの笑顔を見て、これでよかったんだなと思い、照れくさそうにしていた。

後日、気付いたことであるが、村紗がぬえにキスされた日、村紗のセーラー服の背中には、なにか赤いもので『むらさだいすき?』と、文字をあまり書き慣れていないような字で書かれていたそうである。村紗はこれに気付かず、ぬえと別れた後も村を歩いていたため、村中の人たちに夫婦の仲を自慢していると思われ、村紗は恥ずかしさのあまり数日間、寺の外へ出ることができなかったそうであった。

〈完〉

彼女にとってのアンノウンハート(前書き)

気づいてないのは水蜜だけー

彼女にとってのアンノウンハート

居間に行くと、ぬえがちゃぶ台に突っ伏していた。苦しそうに顔をしかめている。

珍しいこともあるものである。

ちよつとだけ心配だった。

「どしたのぬえ」と私は聞いた。

「だるい」

「初潮？」

「……」

私は思ったことを素直に言うのが一番だと思っている。すると殴られた。

「さすがに随分前に来てるわ！」

その怒りかたもどうかと思ったが黙っておいた。

本当は元気なんじゃないの、と思わないこともなかったけれど。一応心配なので私は「ちよつとこつち見て」と促し、ぬえの熱を測ってみた。測り方は至って簡単、おでこにおでこをくつつけるだけである。

「っ、な、何すんの」

ぬえは、それになぜだか抵抗して暴れだした。なので私は、無理やり押さえつけた。

「大人しくして、熱測る」

「ね、熱　　！　わざわざそんな測り方しなくていいでしょ……」

「体温計どつかいったんだもん」

我が家は健康な方々ばかりなので、そんなものの在り処なんて誰も憶えていない。

あんまり暴れるものだから、私はぬえの背中に両腕を回して、が

つちりホールドした。すると大人しくなった。
言わんこつちやない、疲れたのだろう。体調が悪いなら黙っていればいいのに。

「……うーん。確かに、けっこうあるかも。今日は家事当番休んで、安静にしてなよ」

身体を離して、告げた。顔を見ると少し赤い。妖怪には珍しいけど、風邪だろうか。

「ふんだ。家事なんていつもしてねーし」

「ああそうだったね。そこ自慢げに言うことではないけど」

「船幽霊さえやってないムラサに言われたくないね」

「……それは言わないでよ」

そこを突かれると結構へこむ。ぬえが私に文句を言うと必ず出てくる、私の負い目だった。

「やいヒキニート」

結構へこむ……。

しかしこうなったぬえは加減というものを知らない。指を差して私のことを笑い出す。

うっ、悔しい。今日は私が優勢だと思ったのに。

「主婦だから。ニートじゃないから」

「主婦？ 誰の」

「え？ う……？ 寺、の……？」

「ぶっ。何あんた寺と結婚すんの」

結局大人しかったのは少しの間だけで、ぬえは風邪なんかものもしいないふうに、普段と同じくゲラゲラ笑った。うざい。心配して損したかもしれない。

私とぬえはよくこうして、ちょっとしたことから煽り合いになって、口喧嘩になって、ひどいときには殴り合いになる。ほとんどは誰かが調停するまでもなく、すぐに終わるのだけど。ちなみに私は

口喧嘩の段階で勝ったことがない。

「元は自分の船だからいいんだよ。恋人みたいなもんだからね、ちくしょう」

私はこの寺と添い遂げる覚悟なのだ、とでも言えば大人しくなるかと思っただけ、ぬえは全然動じなかった。

「そうか。恋人を解体したり改造したりしてしまっただけだ」

「う」

そ、それは、資金が足りなかったのだから仕方ない。貧乏は罪なのだ。

だけでもこうはつきり言われてしまうと、なんだか申し訳ない気持ちになってしまっただけだ。ぬえの思う壺である。

寺が、復讐を胸に誓ううちにいつしか地球を守るヒーローになったりするかもしれないと思うと気が気でない。私はシヨツカーじゃないし、それ以前に般若の面ライダーなんて絵的に最悪だ。

……って、そんなことはどうでもいい。あ、やっぱりあまりよくないけど、ぬえの風邪のほう優先事項だ。からかわれている場合ではない。

風邪の看病がどうとかって言っただけなのに、なんで私は罵られているのか。

「……そ、それより寝てなくて大丈夫？ おふとん敷くよ？」

「ん。そこまでしてくれなくて結構よ。辛くなったら勝手に寝るし、せめてもの優しさがやんわり断られてしまった。」

悔しかった。さんざんバカにされて、なおかつ好意も受け取ってもらえないなんて。私だって一応、仏門に入った妖怪の端くれ。こ

うなつてくると、どうにかして役に立つところを見せたくなくなるのだった。

「そだ。もうすぐお昼だけど、食欲は？」

「あんまりない」

「じゃあお粥にしようか」

「いらない」

「お粥にネギ入れたほうがいいかな」

「聞けよ」

「聞かないね、嫌だつて言ってもどうせ必要になるんだから。あ、置き薬あつたな。食後になんか飲んどころか。今のうちに氷買ってきたほうがいいかな。あ、その前に濡れタオルでも……」

「ちよつとムラサ」

予定を練っていると怒られた。

「なんだよ」

「大したことないし、看病なんかいらない。もう寝る」

そう言つてぬえはそくさと部屋を出ていった。足取りは、そこまでふらついてもいなかった。

しょんぼりである。病人相手に大敗だ。心配しながら煽るのは難しい。

多少の下心はあつたものの、看病したかつたのは本当だったのに、いらぬとはつきり言われると寂しいものである。

それでも、心配はやめなかった。ぬえの言うことだから、強がりなのかもしれないし。私がいくら言つたところで、あいつなら倒れるまで意地を張つて、看病を拒みそうなものだ。

本当に大したことがなければいいが、もし万が一があつたら困るのはぬえだ。そうなる前に手を尽くしてみたかった。

……それに、一応、謝りたいし。

料理ができなさそうとよく言われる私だけど、お粥一杯作るぐらい訳ない。今日のお昼当番だった一輪の横にお邪魔して、お粥を炊いた。ぬえは野菜がだいたい全部苦手であることを、一輪に指摘されて思い出したので、ネギを入れるのはやめて卵だけにした。

あいつは食べ物だけでなく、色んなことに対して好き嫌いが激しい。野菜が嫌いでお肉が好き。魔法が嫌いで幻術が好き。退屈が嫌いで変化が好き。白が嫌いで黒が好き。着飾っている人が嫌いであつな格好をしている人が好き。

もしかしたら、楽しそうにしている私が嫌いなのかもしれない。じゃあ、何をしている私なら好きになつてくれるだろう。

ぬえのいるだろう寝室に、おかゆと箸と水だけ載せたお盆を運んだ。挨拶もなく襖を開けて見ると、彼女は布団も敷かず、窓から顔を出して突っ伏していた。

振り向きもしない。仕方ないから、私は「お粥できたよ」と一言言って、何も無い畳の上にお盆を置いた。

返事がない。

まだ怒っているのだろうか。

「あの、ぬえ。さっきはごめん、ね……?」

納得はいかないけれど、いかななりに謝った。けれどそれでも反応がないから、私は傍まで寄って肩を叩いた。するとぬえの身体は、窓から力なくずり落ちて

そのままずりりと、床に転がった。

ぬえの荒い寝息だけが聞こえる部屋。一輪は毛布をまくって、ぬえの脇からちよつと埃っぽい体温計を抜き取り、「九度五分」と咳いた。

そんなにあるのは想像の外だった。

意外におでこで熱は測れないものらしい。私の低い体温では、相手の微熱と高熱の違いが分からないらしい。

不覚すぎる。

どんどん申し訳なくなってくる。

だけど、そんな熱を隠そうとしたぬえもぬえだ。言わんこつちやない。気を失うぐらいの無理をして……そんなに私の看病が嫌なのか。

羽の付け根が痛むから、ぬえは仰向けに寝ることができない。普段はいいだろうが、こんなときは苦しそうだ。マイペースな私は、妊娠したときはどうするんだろうと余計なことを思った。

そもそもこの正体不明は妊娠できるのか？ できるとしたら何と交配できるんだろう。人間ともできる？ 妖怪同士だけ？ それとも同じ正体不明同士じゃないとダメだったりして。

船幽霊とはどうだろう、と一瞬だけ変な想像をして、そこでようやくはつとなった。いや、そんなことを考えている場合じゃないだろ、私。思考があらぬ方向へふっ飛んでいる。

「そんなに落ち込まないで。みつのせいじゃないよ」

一輪に告げられた言葉の意味が、すぐにはわからなかった。何も言い返さないでいたら、彼女は優しく笑って「それなら、後は貴方が看病しなさい」と言った。そして私の返事を待たず、静かに部屋を出た。

……???

何を察してくれたのかがよく分らなかったけど、ともかく私は

ぬえのいる寝室に取り残された。一輪はいつも気を利かせすぎだと思ふ。今のは完全に先走りにしか見えない。

だけど好都合だ。一輪のお墨つきとあらばぬえも文句は言えないだろう。心が張り切りだすけれど、それを顔に出さないように我慢する。私が楽しそうにしていると、ぬえをまた怒らせてしまうかもしれないから。

手元にあるのは水の入った桶と、タオルが何枚か。後はぬえがいつ起きても食べられるように、笹の葉にくるんだ小さいおにぎりと、飲める水の入った小瓶がある。さっきのお粥は、無駄になってしまった。仕方がないから食いしんぼうな寅に食べさせた。喜んでいた。部屋を見渡すと、いつしか、窓から夕暮れの日差しが差し込んでいた。病人に暑苦しそうだけど、カーテンなんて洒落たものがあるわけでもなかった。

かつて住んでいた地底に太陽はないから、ひよつとしたら、慣れないぬえにはこの日差しがかなりの負担かもしれない。

何か遮るものがないかな、と辺りを見回す。脚を畳める便利なちやぶ台が壁に立てかけてあったので、私はそれを窓際まで連れて行ってみた。

丸いちやぶ台を病人の横でごろごろ転がす私。端から見たら凄く不審だと思ふ。

窓がちよつとだけ隠れて、入り込む日差しの量は少なくなった。だけど高さが足りていなくて、窓は下半分も隠れなかった。ぬえに差す光もちよつと半分だけしか減っていない。

あーせめて。

せめてぬえが、布団ごともう少し窓に寄ってくれたら、日陰にすっぽり納まるのに。

それがやたら悔しかった私は、悪いと思いつつも今度はぬえの寝

ている布団をそーつと引つ張ることにした。

起こさないように慎重に。幸い、ちょうど畳の目の流れに沿って動かせるので、布団は思ったよりすんなり滑ってくれる。

ちよつとづつ、ちよつとづつ。

なのに、あと二、三寸ぐらいで布団が全部日陰に行く……と言ったところで手が滑って、ぬえを起こしてしまった。

あからさまにだるそうな彼女と視線が合う。

「あ、お、起こしちゃったかな」

私は妙な行動をごまかすのと悪びれるの、半々ぐらいの言い方をした。

「……何してんの」

苦しそうなかすれ声だったけど、起き抜けの割に、ぬえの頭はちゃんと働いているらしい。ごまかしきれなさそうだった。

いや、変なことをしているとは薄々思っけていても、一応善意からの行動だったのでごまかす必要もないのだが。

「えとその、畳の状態を確認しようと思っけて」

「ああ……？」

我ながら意味不明である。素直に親切心というのが恥ずかしかっただけなのだが。そもそも、ぬえに親切にしようなんて思ったのが珍しい。

相手が病気となると、そうなるものなのだろうか。

「お前は訳のわからん奴だなあ」

「……正体不明にだけは言われなくなかったよ」

ともかく、若干布団の端がまだ日に当たっているけども、ぬえを日陰に持っていくことには成功したからよしとする。

どうせ相手はぬえだが、私は鬼ではないので任された看病は一応こなす。水枕を替えてやりながら、「気分どう？ 辛い？」と聞いてみた。

「面倒くさい」とぬえは答えた。

「え」

「何をするのも面倒くさい」

「それ、いつもどおりじゃん」

病人のくせに、庇護欲のひとつもそらない言い方だった。こんなことを言うときだけ声がはつきりしている。素直に辛いといえれば済む話なのに。

もつとも、彼女があまのじゃくなのは今に始まったことじゃないから、私も看病をやめてやるほど怒っているわけではない。ただちよつと悔しいだけだ。

「この瓶、飲水ね。笹におにぎり包んでるから、好きなとき食べていいよ」

「ん」

ぬえは返事なのか何なのかわからない声を出して、うつ伏せのまま首だけそっぽを向いた。了解なのか、拒絶なのかもはつきりしな

い。
いつものことだけど、本当に、全く、可愛げがない。
病気のときぐらい、少しは頼りにするそぶりをしたっていいじゃないか。

私たちはそれからしばらくまともに会話をすることはなく、ただその場にいた。看病といっても、ぬえが求めてくれないなら、することなんて何もない。いつそ一人で寝かせたほうがいいかなと思うけど、それでは私の気が済まなかった。

何かできることを探した。手元のタオルに目をやって、ああこれで汗でも拭いてやれるなと思った。早速タオルを水桶に浸して、適当に絞った　　ところで少し冷静になった。

私は今何をしようと思った。

高熱と日射で汗ばんだぬえの身体を拭こうと思ったのだ。

それって、……だめじゃない？

顔とか首元とか腕とかだけならいいかもしれないけど、これだけ熱があると、その、全身汗だくだろうし。私だってそれくらい想像できる。

そうすると全身拭かないとあんまり意味がないし、じゃあ私はぬえに「貴方の身体じゅう全部拭かせてくださいっ！」とお願いしたいといけない。それは無理だ。

キレられそうだ。

この高熱のときにキレたら命に関わる気もするから余計無理だ。

とりあえず既に絞ってしまったタオルは、そっぱを向いたままのぬえに差し出す。せっかく絞ったから使わないのも勿体ない。

「これで身体拭きなよ。汗、掻いたでしょ」

自分で拭くよう促すだけなら、文句もないに違いなかった。

「……」

ぬえがのそつと振り返って、タオルを見て、私を見た。その仕草に、なぜだか私は少し緊張した。ひよつとしたら、これすら受け取ってくれない危惧を抱いた。彼女がこのタオルを受け取るか否かで、私の気持ちは大きく変わるだろうと思った。

「いらない」

ぬえの手は伸びなかった。普段ならなんてことない一言だったけど、私はそれになんだかすごく落胆して、タオルを置いたのだから置いてないのだから、意識もできなくなった。

私は自分が全く頼りにされていないことに気づいた。こんな熱があつてなお、ぬえに差し出した手を拒まれたような、そんな気がした。

「私、今、動く気が……」

ああ、そうかと私は思った。

苦しそうな声は、小さくてそれ以上聞き取れなかったけど、言いたいことは伝わった。高熱を出した状態で、わざわざ起き上がって服を脱いで体を拭くなんて大変だというのだろう。彼女はまたそっぽを向いてしまった。

言われてみれば当たり前だった。私って、どれだけ想像力がないのだろう。自分のことで精一杯で、これでは看病どころじゃないではないか。ははは、そうだよ、なんて乾いた笑いでごまかしたけど、正直、落ち込んでいた。

せっかく看病を任されたというのに、やることなすこと、裏目に出る。もしかして、私が拭いてあげると言ったほうがまだよかっただろうかと考えて、いや、それでも結果は同じだと思った。

ぬえが弱っている今ですら怒らせるなら、そりゃ普段仲よくなん
てできっこない訳だ。悲しくなる。私だって……私だってぬえと仲
よくしたい気持ちぐらい、あるのに。

丸い文字で”船長室”と書かれたプラカードの下げられたドアを
くぐる。背筋が伸びなくて、端から見たらいかにも無気力な姿だろ
うと思う。

「ニートかあ」

外の世界では、勤勉さに欠けた者をそんなふうと呼ぶのだと、ど
こぞの巫女が自信たっぷりに吹聴していたことがある。それを聞いて
からというもの、ぬえは私を事あるごとにニート呼ばわりするよ
うになった。

勤勉さに欠けているのはお互い様だと言い争ったこともあるが、
結論としては、だめな奴同士で上か下か争っても意味がなかった。

私はもつと精進して、仲間の役に立ちたいのだ。そのためだから、大事な船をお寺に変えてしまうことだって許せた。舟幽霊が寺幽霊か何かになったって、それで聖や一輪や星が喜ぶならそれでいいし、皆が幻想郷に住むのがいいというなら、私は二度と海が見られなくたって構わない。今の私は何もしていない、何の妖怪かもわからないようになってしまったけど、それでも後悔だけはしていない。

ぬえはその決意を全否定するかのようになり、私を拒絶するのである。さすがにへこむ。

そりゃ、言うほど役立つてはいないけれど……。

ベッドに仰向けになって横たわる。天井の木目をぼんやり見ながら、あいつは私が嫌いなんだろうかと考えた。そんな自問、答えなんか出るはずがないのはわかっているけど、一度不安になると気になつて仕方がなかった。

ぬえは特に、好き嫌いが激しいから、怖い。

ぬえだつて今はもう家族だ。嫌われるのは悲しいことだ。

ぬえのために何かしたい。「ありがとう」って言われたい。

それが叶わない自分の力量のなさが悔しい。

はあ、と溜息を吐いた。

自分が無神経すぎるらしいことは自覚している。察しは悪いし、発想も貧困だからストレートにしか喋れないし、計算謀略なんでもつてのほかだし、聖の説法だつて、まだあまりわからない……。要するにバカだから、人の気持ちがるくにわかつていないんだと思う。聖には「それでいいのよ」と諭してもらったことがあるけど、私にはどうしてもこれがいいなんて思えなかった。

こんなだから、ぬえを怒らせてばかりなんだろう。

今まで親しいなりのからかい合いだと思い込んできたけど、もしかしたら本当に、ずっと嫌われていたのではないかと、思ってしまった。

「……はあ」

悪いほう悪いほうに考えてしまうのは憂鬱になっている証拠だ。いいことなんてひとつもないから、こんな日は早く寝てしまったほうがいいのだけれど。

まだ日も完全に沈まない時間だから、それはそれでどうかと思う。

私は何もせず、しばらくぐだぐだ過ごした。

そのうちに晩ごはんと呼ばれた。食卓に行く途中でぬえのことをちょっと気にかけて、こっそり襖を開けて覗いてみた。

ぬえは、さつき別れたときと全然変わらない姿勢で寝ていた。相変わらずうつ伏せのまま、頭だけそっぽを向いている。だけど水とおにぎりは減っていた。

食べてくれたんだ。

ちよつとだけ気持ちが和らいだ。

「寝ちゃったかな」と、私は小声で言った。

返事はなかった。本当に寝ているのだと思いたい。

そつと襖を閉めて、食卓に向かった。気分を変えるために、いっぱい食べるのがいいと思った。

夕食を食べながら、一輪と少し雑談をした。最近、人里の外れに
”えいがかん”なるものができたらしい。”えいが”という動く写
真みたいなのが見られる場所なんだという。

突然現れたものだから、最初は博麗の巫女が駆りだされたり色々
あったとか。けれど調べてみると無害そうとのことと、とりあえず
有効利用することになったらしい。試しに四日前、初公演を行って
みると、その摩訶不思議な光景が里の人間を中心に大反響を喫した
そうである。

「大魔神マジ超ヤバイ、って巫女が言ってた」
と、一輪が言う。

「三日後にまた公演があるらしいから、ぬえと一緒に行ってみたら
どう？」

提案されて、私はしどろもどろになった。

「……ぬえと？　なんで」

「うん？　なんで、ってわけじゃないけど。仲いいんだから、いい
じゃない」

不思議なことを言うものだった。一輪は頭がよすぎて、私には思

考が追いつかない。私とぬえの仲がいいなんて、おかしい。いつだって喧嘩ばかりしているのに。

世にも奇妙な動く写真。どんな妖怪が宿っているのだろう。気にはなるけれど、私が誘ったところで、ぬえと一緒に遊びに行ってくれるとは思えなかった。

「ただの風邪なら、三日もすれば治るでしょ」

念を押す一輪の言葉に、生返事をして会話を終えた。色んな言葉ごと、ごはんを飲み込んだ。

桶の水を交換しに、一度寝室へ戻る。未だそっぽを向き続けるぬえに「水、取り替えるね」と言つて、桶と小瓶だけ持って井戸まで行った。道中、難しいことは何も考えなかった。ただ待たせたら悪いという気持ちから、自分で自分を急かした。あとは、井戸水を汲むときにちらつと、ダメ元でぬえを”えいが”に誘ってみようか、どうしようかなあ、と思っただくらいだった。

寝室に戻ってきた私を待ち受けていたのは、布団の上に起き上がってじつとこちらを見ているぬえだった。急だったから、襖を開けた瞬間少し驚いた。

よく思い出してみれば、ときどきぬえがやっている顔だった。今みたいに、彼女は無表情でじっと私の顔を見ることがある。いつもなら目が合えばやめるのだが、今日はそうしない。

不思議に思ったが、あまり詮索はしたくない。また余計なことを言っただけだからだ。

「ついでに飲水も淹れといたよ」

私は桶を置いて、ついでに水を入れ直した小瓶も差し出した。ぬえは赤い顔のまま、ゆっくり小瓶を手に取って水を飲んだ。まだぼうつとしているのかもしれない。

ごくごくとゆっくり喉が鳴り、水は時間をかけてなくなっていく。相当喉が乾いていたらしい。

「まだ汲んでこようか？」と私が尋ねると、

「もついい。それより、」と彼女が答える。

その瞳が、すぐるように私の目を見上げた。

「暑くて汗がひどいの」

目つきの割に、言葉はやけにぶっきらぼうに放たれた。そんな暴投が心にデッドボールをして、

「……………うん？」

私は訳がわからなくなった。たった一言で、「えいが」に誘おうとしたことだっけすっかり忘れてしまった。

突き出された濡れタオルを、どうすればいいのかさえわからない。

いや……………だつて、だめじゃない？

おかしくない？

私はぬえが言ったことの意味を、足りない頭をフル回転させてもう一度よく考える。

えっと。えっと、そうだ彼女は濡れタオルを差し出しなが

ら汗がひどいと言ったのが事実と私は認識しているこれを差し出す
ということは私が受け取ることを想定しているはずでわざわざ差し
出すからにはそれを使用してほしくないし使用するべきだという意
思表示となりうるわけでまさかタオルを差し出してそれを放置しろ
などという意思表示にはこの場合不自然であるとすればまた汗がひ
どいという愚痴じみたセリフをわざわざ私に告げるという行為も同
時に勘案するにあたり二つの命題を結ぶ論理として最も単純な解釈
は汗をこのタオルでどうにかしろという依頼ないし命令と解するこ
とと思われるそのため私は次の行動として彼女の身体に張り付いた
汗をこのタオルを使用することで拭うことが求められているのだと
推測できるのだがその行為はこれまでの会話を振り返ってみると不
適切もとい不自然なところが多いなぜなら彼女は私のことが全然好
きじゃない可能性が高いのにも拘らずわざわざ肌を晒してまで私に
親密な

ああいやだめだ、自分で意味がわからない。落ち着こう。えっと
その。つまり。

わたし、あせふく。

ぬえ、あせふかれる。

そのため、わたし、ぬえぬがす。

わたし、べたべたさわる（おそろく）。

ぬえ、それ、さつきいやがった。

……はずなのに、今になって求めてくる？

うん。

こういうことだろう。

けれどわからないのは、どうしてぬえがそんなことを頼んだのかだ。だって、ついさっき、私はぬえをその話で怒らせたばかりだ。さっきまでのぬえだったら、私なんかにお世話されるのは絶対に嫌がっていたはずで。

なのに。

私がかまごまごしていると、ぬえはまた目つきを悪くして、「わかんない？」と言った。

短い言葉に、心が見透かされているような気がした。私はもう混乱を止めきれない。なおもまごついていると、彼女はタオルを無理やり手渡して、さらにこう言った。

「脱がして」

それだめじゃない!?

と、思わず叫びそうになったけど声が出なかった。代わりとばかりになぜか胸の鼓動がバクバクと自己主張をし始める。

そりゃ、汗は全身掻くもので、高熱とあらばお風呂に入るわけにもいかないし、拭くとしても自分で全身拭けるわけじゃないし、誰かが拭いてあげないといけないのはわかる。

けれどなんで私に。本当になんで？　だって私じゃなくてもいいはずで、私なんかよりもっと器用な者もいるしもっと気が利く者もいるし、もっと好きな人だっているだろうに。どうして私に。どうして。

「あ、あの、ぬぬぬぬえ、わたし、そんな、あの、」

言葉はおぼつかなくなり、ぬえの顔は見られない。私まで高熱を出したかのように身体じゅう熱くなって、意識がどこかへ飛んでしまいそうになる。

「はやく」

「は、……はい」

頼んでるのはぬえなのに、なぜ私が怒られる。とりあえず傍まで寄って、……気づく。ぬえがいつもの黒い服のままだった。

そういえば、急に倒れたから慌てて気づきもしなかったが、私も一輪も、寝かせるだけで一度も着替えさせていないのだ。丈が短いとはいえ窮屈だったに違いない。暑い日差しの中、悪いことをしたかもしれない。

黙って脱がしたら、それはそれで怒りそうだけど。

ぬえは本当、すぐ怒る。

とても気難しい。どうしても彼女の考えていることがわからない。何が楽しくて何が嫌なのか、未だに。私に世話をされるのが嫌なんじゃなかったのだろうか。だとしたら、私の何が彼女を怒らせるのかますますわからないし、なんで今は気を許すようなことを言うのかなんて、もっとわからない。

もたもたしながらも、私は意を決してぬえの目の前に座った。元のリボンを見つめる間、ぬえは、じっと私を見ていた。なんだか妙な気分になるから、できればやめてほしかった。

「あの、」と私は手を止めて言った。

「何」

「いいの……？」

私にはどうしても自信が持てなかった。

「いいから言ってるんだよ。わかれよ」

ぬえはまた声を荒らげた。だけど一度荒らげただけで、また大人しくうずくまった。

「そ、そっか」

唇を強く結ぶ。理由はともかく、私はまだ役立てるらしいことを、ようやく理解する。けれどさっきまで強く願っていたことが、訳も

わからないままあっさりと叶ってしまったから、却ってどうしていいかわからない。

ドキドキする心を止めることもできないまま、一旦タオルを畳に置き、なぜか正座をしてから、ぬえの胸元のリボンを引っ張った。それは容易くほどけてしまい、服の隙間から、彼女の鎖骨の辺りが少しさらけ出された。

なんだか変な気分だった。私が緊張しているのは、きっとぬえの心を必死で探ろうとしているからだ。ここで落胆させてしまったら、もう二度と口を聞いてもらえないような気がした。

裾の短いワンピース。四つあるボタンを、上から順に外していく。手が震えるせいでうまくできずに、もたついた。ぬえをこれ以上困らせまいと焦ると、余計にうまくいかない。何とかボタンを全て外すと、ちらつと下着が見えた。ドキツとして、一瞬、無意識に目をつむった。余計なことを考えそうになって慌てて、その前にと腰の辺りから服を掴んで、一気にまくり上げた。

「んっ」

勝手に万歳の格好になったぬえの腕から、ワンピースを引っ張り上げる。肘の辺りで汗に貼りついて、ちょっと取りにくかった。そのまま羽まで通して、服は完全に私の手元に渡った。

ああ、暑い。なぜか私まで汗ばんでくる。しかしそんなことを意識する以前に、ぬえの下着姿が気になって仕方がない。淡いピンクを基調にしつつ、黒い紐をレースであしらったランジェリーだった。妙なところでおしゃれしていると思った。

下着姿に対してだけこんなことを考えるのもどうかと思うけど、すごく、可愛かった。思わず、息を飲む。火照って赤みがあった肌が、余計に変な演出をする。

いや、……いや。冷静にならなければ。私は看病をしているだけなのだ。緊張しているから、訳のわからないことを意識してしまった。いくらなんでも、病人相手にここまでおっかなびっくりしていたら、ますます嫌われてしまいそうだ。
私はぬえに嫌われたくないんだ。

手元の服を置いてある濡れタオルと交換し、気を利かせたつもりで彼女の後ろに回る。

「じゃ、じゃあ、その、いきます」

「何その宣言」

「……さわらせてもらいます」

「変態だ」

「違う」

私はやっぱり正座しながら、ぬえの首筋からタオルを当てた。直後、彼女は「ひやつ」と甲高い声を出しながら身体をくねらせた。

「ご、ごめん、冷たかった？」

不覚にも、ちょっと可愛いと思ったのは秘密だ。

「……平気。びっくりしただけ」

四十度近い熱のある身体には、井戸水の冷たさは負担になるかもしれない。

それにこの作業、色んな意味で私の神経にもかなりの負担である気がするので、早く終わらせてしまおう。

今度はなるべくそっと、タオルを首筋に当てる。ぬえは少しだけぴくっとしたけれど、もうさっきみたいに驚きはしない。そのまま力を加えずに、首元から肩、鎖骨のくぼみは少し丹念に、それから両の二の腕、腋、そして肘から指先まで軽く拭いてあげた。ぬえはされるがまま、大人しく私の仕事を見ていた。

次は背中。ブラのホックに引っ掛けないように気をつけながら、丁寧に拭いていく。ぬえが少し背中を丸めてくれると、やりやすく

なつた。

不意に、「ムラサ」と、彼女が呼んだ。

「なに」

「外していいよ」

手が止まった。

「……何を？」

いくらなんでも、この私ですらわかりきっているけど、そう思うより先に口が動いた。

「言わせんの」

ぬえの声は笑みを含んでいた。まるで馬鹿にしたように、鼻にかけた笑みだ。

いつもしている、あの笑みだ。

「言わなきゃわかんないもん」

「へえ」

私は敢えてとぼけた。唐突に身体を委ねてくるぬえに対して、漠然とした不安を覚えたのだ。

腋の下辺りを吹いたあと、彼女の正面に戻って細長い脚を拭く。ふとももから、膝の裏を通ってふくらはぎ、そして足首、くるぶし、足の甲、裏、あとは指の間をひとつづつ。できる限り黙々とやった。ぬえもあれきり黙った。

ひととおり綺麗にしたら、私は一度タオルを水桶で洗った。自慢の腕力で強めに絞ってから、それをぬえに手渡した。

ぬえは少し躊躇ってから、それを受け取った。そして、当たり前のように自分のブラを外しだした。

「……っ」

思わず視線を外した。鼓動がさらに大きくなって、身体がさらに熱くなつていくのがわかる。

み、み、見ちゃったじゃないか。落ち着け私、落ち着くんた……。

そもそも、なんでこんなに、意識しているのだろう。

別に、ぬえの裸を見るのは初めてではない。一緒に暮らしていれば、たまに、何かの拍子に見てしまうことぐらいある。だけどそんなこと、前までは全然気にしなかったのに。今の私は、明らかにおかしい。

私はいつの間にか立ち上がっていて、ぬえに背中を見せながらそわそわしていた。

見ちゃいけないと思って目を逸らしていたら、今度は耳が勝手に全力を出して、色んな音を拾ってしまう。背後から衣擦れの音が聞こえたり、部屋の外からかすかに、聖と星が何か話している声が聞こえたりした。おかげで私の心はもう、煩惱でめちゃくちゃだ。

「ムラサ」

衣擦れの音が止んで、代わりにぬえの声が出た。頭から空中にふらふら飛んでいきそうになっていた意識が、すごい勢いで戻ってきた。

「な、何かな」

私はなるべく力を抜いて、何でもないふりをしたつもりで答えた。「タンスから服、取ってよ」

「ふえっ？」

だげどぬえがそんなことを言うから、またすぐに肩が上がった。

こんなお願い、今の私にとっては無茶振りに近かった。

タンスはこの部屋にあるが、病気のぬえが取りに行くには半端に長い距離がある。自分でやれとはちょっと言いにくい。

だげど私は、この状態で、ぬえのタンスを開けたくはなかった。なんというか、タンスを開けて下着が見えた瞬間、鼻血を噴射して死にそうな気がする。

幽霊が本当に鼻血を噴けるのかは、自分でも知らないけれど。

もう一度死ぬことがあるのかも知らないけれど。

私はだいぶ躊躇ったが、ぬえの姿を見ないようにしながら、意を決してタンスを前にした。気合を入れて、上の段から順に開けていく。

不思議な気分。なんだか自分が、男の子になったみたいだと思っただ。男の子はなんでか、女の子の身体とか下着とか、すごく気に入るから。今ならその気持ちがわかる気がした。きつと今の私みたいに、気にしたくなくても気にしてしまうのだ。

だけど私が一番気にしているのは下着でも裸でもなくて、きつとぬえ自身のことだった。思えば、今日はずっとぬえのことしか考えていないのだ。ぬえが好きなもの、嫌いなもの、欲しいもの、いらぬもの、色々考えたけど、結論は出なかった。

もつとも、よく思い出してみると、そもそもぬえは訳のわからないところがウリの妖怪なのだから、訳がわからないのは当然なんじゃないかとも思う。だけど何もかも全く理解できないという訳でもないのがまた困る。まるで秋の空だ。私はそんなぬえのことをずっと考えて、気にしていた。訳のわからない奴だけど、ひよっとしたら仲よくできるのではないかと、ずっと気にしていた。

相手のことを気にしすぎると、こういうのも、気になってくるのだろうか。私はタンスのなかに雑然と並んでいる下着類を見つけて、ワナワナと手を震わせた。

シックな色調のものが多ければ、ピンクとか水色とか、可愛らしいものもちらほらある。

というか、多い。下着類がやたら多い。他の段にはいつももの黒い服とそのバリエーションみたいなのばかりなのに、下着だけやたら色々種類に富んでいる。どうしてなんだろう。そこにはかりこだわっても仕方ない気が、私にはするのだが。

緊張して身体が硬いけど、あまりまじまじと下着を見ていると変態みたいだから、ほとんど目をつむって適当な下着をさっと手に取った。急いでダンスを閉じて、勢い任せに振り返り、持ち主に下着を手渡す。こんなに素早く動いたのは生まれて初めてだ、と少し満足したところで目を開ける。

ぬえは全裸だった。

「ちよお　ッ!？」

思わずのけぞって、尻餅をついた。

完全に不意を突かれた。そりゃ、さっきまで服を脱ぐ音が聞こえていたんだから、裸で待つていたって不自然じゃない。冷静な私だったら、まだ予測できていたかもしれないのに！

「何ひとりコントやってんの」

ぬえはくすくす笑った。

うう、恥ずかしい。裸がなんだ。ぬえがなんだ。こんなことに戸惑うなんて、私は一体何を考えているんだ。

「いいから……はやく、パンツ穿いて」

「はいはい」

ほとんど這うような動きで、ぬえから離れる。もうだめだ。すっかり変態だと思われていそうだ。

せめてぬえも、もう少しだけ恥ずかしがってくれたら、私だけこんなに恥ずかしくなることもないのに。一人でてんでこ舞いになって、まるで遊ばれているようだ。

壁を見る。衣擦れの音のあと、ホックを填める音がする。もうこんな、聞いていられない。意識を他所へ放るため、自分の鼓動の音に集中する。

どきどきどきどき。

どきどき。

どきどき……。

あれ？ と、思考が急旋回した。

私、幽霊なのになんで鼓動が止まらないんだろ。心臓とかあるんだろつか、わからない。なにぶんこんなよくわからない身体だから、ときどき自分が既に死んでいることを忘れそうになる。

そういえばこの間里の健康診断にふらつと立ち寄ったら「生命力が溢れんばかりの健康体ですね」と言われた。すっかり喜んでそれを周りに言いふらしていたら、ぬえに「それ変じゃない？」と言われてはつとなつた。そういえば変だ。よく考えなくても生命力なんてゼロのはずだよ私。っていうか思い出してみるとあの兎のお医者さんが言ったこと自体皮肉だったのかもしれないしそういうえば妙に演技がかったセリフだった気も、ああそうかうわあそうだきつとそうだあれは「幽霊のくせにこんなに生命力あるなんてそうまでして生にしがみつきたいのね未練たらたらなのねまるで振られた女の脚にいつまでもしがみついてスリスリしてるダメ男みたいだわ情けないわ」とかいう意味だったんだうわなんか悔しくなってきたぞなんだよ早く成仏しろっていうのかー健康診断しかできないやぶ医者がちよっと生きてるからって偉そうにしてさあだいたいあいつ病院入れるのかな衛生面を考えると病院に動物入れるのはあり得ないと思うんだけどあの仕事でやっていけるのかなばかやろうちよつと心配になつてきたじゃないか今度会つたらそこんとこ聞いてみて

「もつ見てもいいよ」

ぬえの声で、ふと我に返った。

いつの間にか夢中になって考えごとをしていたらしい。鼓動を聞く作戦は効果てきめんだった。後半は鼓動とか全然関係なくなっていたが。

振り返ると、ぬえはもう毛布のなかにすっぽり入っていた。私は、ほっとしたような、少し残念のような感じがした。

ぬえは満足気な顔で私を見ていた。してやったり、とでも言いたそう。くそう、やっぱりおちよくっていたんだ、こいつは。私は真剣に、悩まされていたのに！

いつもだったら悔しがって喧嘩になっただけさ。ぬえの顔はまだ赤く火照っている。あまり大きい声は出せなかった。

「その格好で平気？ 寒くない？」

「シャツもあつたほうがいいよね？ とか色々聞いて、私は敢えて自らを追い込んだ。」

なんとんでもぬえに、すがられたかった。いつそ「ムラサがないと、生きていけないの」ぐらい言わせてやりたい。そうすればこの悔しさも少しは晴れようというもの。

「これでいい」

でも案の定断られる。彼女はいつもどおり、私の気持ちなんてお構いなしだ。

「汗吸うもの、着てたほうがよくない？」

「むー」

それでも食い下がると、ぬえは赤い顔で思慮し始めた。そうだ、そうしてシャツを持ってこいとも頼めばいい。ぬえからのお願いとあらば、気持よく承ってやろう。なにせ強情な彼女だ。こんなときでもない、頼りにしてもらえないのだ。

そう考えていたけれど、ぬえは予想外のことを言った。

「汗掻いたらムラサが拭いてくれるから、いいや」

……あ、ああ、これは一応、頼りにされているのか。これはこれでいいのか。今すぐく、ドキッとした。

いや、頼りにするというよりは、こき使おうとしてるように聞こえるというか、そもそもそういう問題じゃないんじゃない、とも思うんだけど、それでもまあ別に構いはしない。ぬえがそんなふうに言うてくれるならば、私に返す言葉は必要ない。

ちよつと嬉しくなりつつも、そんな気持ちは顔に表さないように気をつけた。

「ふーん。そう。じゃ、ときどき様子見ついでに拭いてってあげるよ」

なるべくそっけなく言った、つもり。しかしぬえには、「鼻の下伸びてる」とすぐに気づかれてしまった。

「やっぱり変態だ」

「ち、違う」

「見たいんでしょ、私の」

「違うって」

それが嬉しかった訳じゃない。

本当に違う。

い、いや本当はちよつと見たいかも……？ でも、そんなふうに言ったら私は今日から変態というあだ名で暮らすはめになりそうだ。

しばらくそんな恥ずかしい問答を繰り返していたが、ぬえはどうしてか、それでも臆することなく私を見つめてくる。終始真顔だった。私なんてもう、さっきの恥ずかしい体験を思い出してもじもじしているのに。

「ふん。まあいいや、ムラサが発情して襲いかかってこなければ、なんでも」

「おおお襲いかからないよ!？」

「私、もうちよつと寝る」

「ちよつ……」

彼女はそうしていきなり会話を打ち切り、そっぽを向いた。部屋はすぐ静かになった。

色々弁明がまだ済んでいないが、病人にそう言われてはごちゃごちゃ言う訳にもいかない。

ああ、今日は手玉に取られてばかりだ。きっと彼女は私のことを振り回して遊んでいるのだ。これじゃ、感謝されるなんて、夢のまた夢かもしれない。

まったく、どうしてこんなに意地悪なんだろう、こいつは。

だけど、いつもと違って、からかわれてもあまり悪意を感じなかったのが不思議だった。

おかげでちよつとだけ、気持ちが軽くなっていた。

次の日になった。ぬえの体調は少しよくなったようで、熱を測ってみると二度近くも下がっていた。

朝食は、私の作ったお粥をもりもり食べてくれた。

「ムラサ、お粥作れるんだね」とぬえ。

「……いくらなんでも、馬鹿にしすぎだよ。ごはんも炊けるし魚も捌けるもん。お菓子は作れないけど」

「カレーしか作れないと思ってた」

「おい」

そう文句を言いつつも、私はかなり嬉しかった。

ぬえが戻ってきた食卓は明るい。時折みんなの談笑が響く。

ただ、まだぬえが本調子に戻ってはいないらしく、いつもなら呼吸をするように当たり前にけしかけてくる悪戯が、今日はない。私のすぐ隣で、やけに大人しくしている。けれども心なしか機嫌がよさそうだった。

今日は珍しく、可愛いなと思った。

昨夜は、もしかして寂しかったのかもしれない。初めは辛そうに横たわっていた彼女だけれど、今にして思えば、私をからかうときになるといつになく嬉しそうだった。……気がする。正直、いつぱいいつぱいの私はあまりぬえの表情まで見る余裕がなかったのだが、何となく、全体の雰囲気、嬉しそうだったように憶えている。

ぬえは私をからかうのが楽しいのだと、わかった。からかわれるのは癪だけど、でも、ぬえがそれで喜んでくれるなら、とても嬉しいと思った。

「そっいえば、ムラサ」と一輪が私を呼んだ。「ぬえに”えいが”」

の話はしたの？」と言った。

「あ、そうそう。まだ」私は答える。

昨日は誘う度胸がなくて、そこまで乗り気じゃなかった私だが、一日経った今日は少しだけ自信が持っていた。

「何、えいがつて？」

ぬえが興味を持ち出したので、私はこの誘い話を切り出すことにした。

しかし聖と星がふと私を見る。なぜかいきなり、揃って私を見た。なんで？ 私がこれから、ぬえとデートの約束をしようという矢先に。

何となく気恥ずかしいから勘弁してよと思ったけど、それを言い出すのも恥ずかしい。

とはいえ、ぬえもぬえで期待した瞳を私に向けているので、私はどうやらこの状況のまま話を切り出さなくてはいけなくなったらしい。

「……動く写真」私は話しました。「人里外れの建物で、見られるんだって」

「写真が、動くの？」

「動くらしいよ。写真の中で、人が」

「何それすごい」

「えっと……明後日。公開するらしいんだけど」

ぬえは興味津々に聞いてくれた。ついでに聖まですごいにっこりしていた。

恥ずかしくて死にそうなのだけど、この調子ならば誘えるかもしれない。

「その」

「ん……？」

女の子を口説くなら、かっこいい言い回しのひとつも言えなきゃいけないのかもしれないが。

難しいことを考えられない私は、素直に気持ちを言うことにした。
「ぬえと行きたいんだ。もし風邪治ったらさ、一緒に見に行かない？」

そもそもおかしいのは、私がぬえにお願いをするのに、こんなに緊張しなきゃいけないことだと思う。別に断られたところで、私とぬえの關係に傷がつくわけじゃないと、頭ではわかっているにもかかわらず。胸はバクバクうるさかった。

ぬえは一瞬きよんとして、小鳥のように首を傾げた。あまり見ない仕草だった。そして、何を思ったのか一瞬ニヤツとして、さらにちよつと悩むような素振りをして私を焦らすだけ焦らしてから、ようやく「いいよ」と短く答えた。

その瞬間、心臓が止まって死ぬかと思った。

断られる覚悟はしていたけど、聞き入れられる覚悟はしていなかった。だって、承諾されるのがこんなにびっくりすることだなんて、思ってもみなかったんだもの！

「え、い、いいの？」

言ってから、たぶんこの言葉は、私の人生のなかでもトップクラスにかっこ悪い一言じゃないかと自覚した。ただと言わずにはいられなかった。

「いいよ」

ぬえは、怒りもせずに答えてくれた。

聖が、これ以上ないぐらいにデレツデレの顔をしてぬえを見ている。私は昨日と同じか、それ以上に恥ずかしくてたまらなくなった。

ぬえだけが状況をよくわかっていないように、また首を傾げた。

「みんなは行かないの？」と彼女は周りに聞いた。

「チケットが二人ぶんしかないのよ」と一輪が答えた。

私は何も言わなかった。たぶん一輪の言ったことは気の利いた嘘なんだと思う。チケットなんてものが必要だつてことさえ、私は聞いてないし。

こんなとき、嘘が下手な奴は黙っておくに限る。だけどまた少し緊張したのか、気づくとぬえをじっと見ていた。「それなら、聖と行きたい」なんて言われやしないかとひやひやもした。

そんなことは特になく、ぬえはくすつと私に笑いかけて、「そう」とだけ言った。

彼女にこんな仕草ができたことが驚きだ。いつも我俣で、だらしないところしか見ていないから。

どうして、いきなり、そんな顔をするのか。やっぱり彼女は昨日から変になった。倒れて頭でも打ったのだろうか……なんて。

それならどれだけよかったことだろう。少なくともぬえの気まぐれな行動にいちいち頭を悩ませる必要はなさそうだ。頭のネジがぶつ飛んでるだけなら、私のことが好きか嫌いかなんて考える以前の問題だ。

だけど答はきつとそうじゃない。ぬえは明らかに私を気にかけていた。無神経な私だつて、今の彼女を見ればいくらか察しはつく。だつて、よく考えてみたらぬえは食事のとき絶対に私の隣に座つたりなんかしない。それだけじゃない、今日はやたらと距離が近かった。茶碗を持つときに肘が毎度ぶつかるくらい。いくらなんでも、この食卓はそこまで狭くない。

少しは、好きになってくれただろうか。

なぜそんなに機嫌がいいのかわからないが、私は全然悪い気はしていなくて、むしろ鼻の下が伸びているんじゃないかと思う。い

つも喧嘩ばかりしているのに、不思議なものだった。たぶん、私は、この飛びつきり不可解な妖怪が好きになってしまっていた。興味深くて仕方なくて、彼女のことをああでもないこうでもないと考えているうち、そいつは心の片隅に居座りやがったのだ。心に彼女がいないと、私は却って落ち着かなくなってしまった。そのせいで昨日は、彼女のことをわかりたくてわかりたくて苦悩するはめになったのだ。

いつからかはわからないが、私は今までずっとそんな調子で、ぬえに對してモヤモヤとした感情を抱え続けていたのだろう。

心に植えつけられた正体不明を、ついに見破ったぞ。へへーん。

だけどそれを勝ち誇るのはちょっと恥ずかしいので、黙っておく。その代わり苦しめられた仕返しを、いつか絶対にしてやろうと、心に決めたのだった。

デート当日、私はさっそく仕返し作戦を決行した。

元気よく私の手を引いて、”えいがかん”のほうへずんずん歩くぬえに、私は「ねー」と呼びかける。

「うん？」と、彼女は振り返りもせず返事をした。

以前なら全然そうは思わなかっただろうけど、私はそれがとても可愛く思った。この日になるともうすっかり、彼女に毒されていたのだ。

だから「好きだよ」と、そっけなく言ってやった。

ぬえは「知ってる」と、そっけなく答えた。

私はない胸を張って勝ち誇った。へへへ、そうだろー、びっくりしただろー、まさか私がぬえのこと好きだなんて、誰も予想だにしない……

え？

あれっ、知って、え？

なんで!?

6月3日はムラサの日 前編(前書き)

まあ、全然日にちずれちゃってるんですけどね。

6月3日はムラサの日 前編

「はあくびばーすでえーいとーゆー」

「なにそれ？」

「あ、ぬえさん。おはよーございます」

「はいはい。おはよーございます」

すとん、と軽い音をたて、つま先からゆっくりと地面に降り立つ。

青空。明るい日差し。涼しげな風。

その全てと不釣り合いな黒いワンピースの裾を揺らしながら封獣ぬえは命蓮寺の境内へと降り立った。

寺の前では相変わらず幽谷響子が彼女の朝の勤めである掃除を行っていた。

機嫌良く、朝の風景と釣りあつた陽気のいい歌を唄いながら。

「で、なにそれ？」

「なにがですか？」

響子は箒の動きを止めながら首をかしげる。

まるで、自分にはおかしなところはない、といったような様子だった。

ぬえは呆れたように首を振りながら響子の口を指差す。

「その変な歌」

「ああ、これですか」

やっと納得したように頷き、にっこりと絵に描いたような微笑み響子はぬえに返した。

「それよりですね、ぬえさんが最近寺にいないとムラサ船長が心配していましたよ」

「いやだから私は歌について聞いて聞いているんだけど……」

確かに、ふらふらしすぎてそろそろ村紗が心配しているころだとは思ったけど、と

ぬえは心の中で一人呟く。

だから今日も、普段はあまり出歩くことのないこんな朝早くから命運寺にやってきた。

まるで、それをなにも知らない響子に言い当てられたかのような居心地の悪さを感じ、

ぬえは響子から視線を反らした。

「この歌はですね」

しかし、響子はそんなぬえの様子など全く気づいていないかのよう
に話を元に戻した。

あつちにいたり、こつちにいたり忙しい奴だとぬえは隠しもせず
に溜息をつく。

こんな変わった奴なのに村紗はわりと響子のことを気にいつていた
りして

世の中なにが起こるかわからない。

自らのことは棚に上げ、ぬえは目を細めながら人差し指をたてなが
ら説明をはじめめる響子を見詰めた。

「誕生日の時に唄う歌らしいです」

「誕生日？ なにそれ？」

「その名の通り、自分が生まれた日のことらしいですよ」

「そんなの覚えていないよ」

「人間の寿命は短いですから、自分の生まれた日を大切に、毎

年その日を祝うらしいです」

「…さつきから、らしいらしいってそれ、どこで聞いたの？」

「小傘さんに教えてもらいました」

小傘…命蓮寺の裏の墓地やとにかく寺のまわりをうるちよろしている化け傘の妖怪が。

小傘だつて妖怪なのに、なんでそんなこと知っているんだという疑問をぬえが浮かべると

その表情を読み取ったかのように響子が説明を加える。

「小傘さんは東風谷さんに聞いたと言っていました」

「東風谷…早苗か」

「そうです」

その名を聞いてぬえは顔をしかめた。

あの天然で凶暴な緑の髪の毛の巫女だ。

話を辿っていけばろくなところに行きつかない。

もうこの話は終わりだと、響子に対してぬえが口を開こうとした時、寺の裏からぬえの名を呼ぶ声が響いた。

響子ほどの大声ではないが、その声は十分、名前を呼ばれたぬえの元に届いた。

聞きなれた、よく通る声だった。

「ぬえ！」

「ムラサ、おはよう」

響子に習い、ぬえも寺の裏から現れた村紗へと朝の挨拶をする。

しかし、村紗は少し怒ったような表情をしながら小走りに二人の元へと寄ってきた。

風が強いからか、村紗の頭にはいつもの小さなキャプテンハットが

ない。
そりゃ、あんなもの被って走ったら、その間にとれて頭から帽子が落ちるからな。

「…ぬえ、なに考えているの？」
「え？」

気がつけば、まるで村紗を馬鹿にするような表情を浮かべていたらしい。

さらにその顔に怒りを浮かべながら村紗がぬえの顔を覗き込む。

「なんでもないよ。ムラサ、おはよーごぎょ…」
「挨拶したって誤魔化されないから」
「誤魔化すだなんて、人間きの悪い」

ここには妖怪ばかりだけどね。とぬえが続ければ、くだらない冗談はいらないとまた村紗に怒られた。

「あ、ムラサ。私、お腹がすいたな。中で何か食べながらゆっくり話さない？」

「他に言うことはないの？」

「いや、だから、その話もゆっくり。ここじゃ響子の邪魔になっちゃうしね」

「いえ、私のことはお構いなくここでどうぞ」

響子は再び手の筭を動かしながらぬえと村紗に笑みを向けた。余計なことをとぬえは小さく舌打ちをする。

「ぬえ」

静かな声でじつと村紗がぬえを見つめる。

緑や深い青が混じった瞳が真っ直ぐにぬえを射抜いた。

ぬえはその瞳から逃げるように、誤魔化すように笑いながら、
髪の毛の先を弄った。

「…心配かけてごめんなさい」

「よろしい　響子、私はぬえにご飯あげてくるから、引き続き
掃除お願いね」

「わかりました。ムラサ船長。お任せください」
「ありがとう」

まるで舟の船員のように響子は村紗に敬礼をした。
村紗をそれに笑顔で応えた。

仲のよさそうなそんな二人のやりとりにぬえは無意識のうちに自らの唇を尖らせた。

心配をかけているだろうなということにはわかっていた。

けれど、もともと何かに縛られるのは嫌な性分だというのもわかって欲しい。

だからといって、心配してもらうことに悪い気はしない。

「…それに、ご飯あげるなんて、犬じゃないんだから…」

「わかってるよ。ぬえでしよう」
「…」

まさか、自分の小さな呟きが聞こえているとは思わず、

前を歩いている村紗の声に驚き、ぬえはぴくりと肩を揺らした。

そして、ばつが悪そうに口を閉じた。

あとは黙って、前に行く村紗のセーラー服に浮かぶ赤い色をした三角のスカーフを見つめた。

太陽の位置がだんだんと高くなり、日差しが二人を照りつける。それから逃れるように、二人は寺の中に入って行った。

6月3日はムラサの日 後編

「ムラサにも誕生日ってあったの？」

食後にだされたお茶が入った湯呑を手に、ぬえはそう呟いた。

畳の上にならしく足を投げ出し、背中ではふわふわと羽や尾を動かしているぬえを見ながら、村紗はその質問を繰り返した。

「誕生日？」

「そう。人間だった頃にはあったの？ 響子が、人間は生まれた日を毎年祝っているって聞いたから」

「人間だったころにはあったよ。ただ、もうこうなってから別祝うこともないし、祝ってくれる人もいないし、すっかり忘れていたけど」

でも、なんでそんなことを？

首をかしげる村紗に、ぬえは面倒くさそうに湯呑を持った手とは逆の手を外へと向ける。

心地いい風が流れ込んできていた。

「響子がそう言った」

「響子が？」

「響子は小傘に聞いて、小傘は早苗に聞いたんだって」

「そう」

それには対して興味無さそうに村紗は自分の前に置かれた湯呑を手にとり、

お茶を口に運んだ。

しばらく、沈黙が二人の間を漂う。

「…いつなの、その、誕生日っていつの」

その沈黙に居心地が悪くなったようにぬえが口を開いた。少し考えるような仕草を見せた後、村紗は静かに首を振る。

「もう、覚えていないよ」

「そう。じゃあ、誕生日ってなにするかは、覚えてる？」

「特に何も無いわよ。ひとつ年をとって成長したお祝いにおめでとう、って言われたり、贈り物をされたり」

「へー」

「自分から聞いておいてなにその態度」

「それ、楽しいのかなって思って」

「…たのしい、んじゃない？」

「曖昧な答えね」

「もう、よく覚えていないから」

まずいことを聞いたかな、とぬえはちらりと横目で村紗の表情を盗み見た。

湯呑を手にした村紗はとくに悲しみや怒りといった表情は浮かべていなかったが、

逆に言えばいつも浮かべている微笑みもそこにはなかった。

村紗があまり過去の話をしたがらないことはぬえもよく知っていた。けれど、ぬえは気を遣って過去の話をしないうちにしながら会話をすることも、

なにかが違つと、感じていた。

そんな村紗との関係をぬえは望んでいるわけではない、と。

(それも、私のわがままだけ)

湯呑を置き、ぬえは両手を畳につけた。
のびをするように、天井を見上げる。外から入ってくる風が頬をくすぐる。

外はあんなに天気がいいのに、この部屋の空気はやけに重苦しい。
また、しばらく沈黙が流れた。

「うん。楽しいよ。お祝いするほうも、されるほうも」

ぬえは、ゆつくりと顔を傾け村紗を見た。

いつからか村紗はぬえを見ていたらしく、目が合う。

その瞳を反らさぬまま、村紗は続けた。

「だって、好きな人だから、お祝いするから。」

大好きな人達に、お祝いされるから、やっぱり、楽しいよ」

「…まあ、確かに嫌な気はしないよね。嫌いな奴はわざわざ祝ったりなんかしないだろうし」

わざとぬえが茶化すように言っても、村紗は表情を崩さなかった。

村紗のこういった根が真面目すぎるところがぬえは苦手だった。

しまったな、と心の中で舌を出す。

「ぬえは」

「うん」

「もし、私が誕生日を覚えていたら、祝ってくれていた？」

「当たり前だよ。誰よりも先に祝うし、誰よりも豪華な贈り物をするよ」

「なぜ？」

「な、ぜ、って言われても…」

真面目だから、だけでは説明できないほど様子のおかしい村紗に

ぬえは慌てて体を起して村紗を見た。
やはり、村紗の表情は変わらない。
笑ってもいないし、怒ってもいない。
なにを考えているのかわからない。
ぬえの心がざわつき、嫌な音をたてる。

「ムラサ、どうしたの？」

「答えてよ、ぬえ」

「…だって、村紗さつき自分で言ってたじゃない。大好きだから、お祝いするって」

「ぬえは、私のこと好き？」

「…」

まるでそれは愛の告白のようで思わずぬえは口をつぐんだ。
きつと、村紗はそんなつもり、ないのだろうか、
恥ずかしがることなんてないはずなのに、なぜか頬が熱くなり、
ぬえは俯きながら一度頷いた。

「好き、だよ。ムラサのこと」

「私も、ぬえのこと好きだよ。ぬえと一緒に」

ふっ、と村紗の声のトーンが明るくなる。
その声のトーンに、反射的にぬえが顔をあげれば
にこにここと笑みを浮かべた村紗の顔があった。
ほっとしながらも、ぬえの頭に疑問符が浮かぶ。

「ぬえが私を好きでいてくれるように、私もぬえが好きだよ。
好きだから、顔見せてくれないと心配になるし、なにかあったの
かと思う」

「あ…」

「だから、ずっと命蓮寺にいなさいとはいわないけれど、最低限、顔は見せてくれると嬉しいかな」

「ムラサ…」

「私は、年にたった一度の誕生日をお祝いされるよりも、ずっと大好きなぬえと一緒にいれたほうが楽しいし、嬉しいよ」

照れたように笑う村紗の顔が、いつもより幼く見える。

私もだよ、とぬえが口を開こうとした時、ぱたぱたと廊下をかける音が聞こえた。

「こういつのを記念日というんですね！」

「響子！」

足音は村紗とぬえのいる部屋の前で止まったかと思うと、そこに外で掃除をしていたはずの響子の姿が現れ、命蓮寺中に響き渡るような大声でそんなことを叫んだ。と、言ってもいいくらいの声だとぬえは思った。

「二人が結ばれた記念日ですね！」

「響子、違うよ、これは…」

「記念日はお祝いしなければいけないと、小傘さんが言っていました！　すぐに聖様にお伝えしてきます！」

「ちよ、響子！」

響子を止めようと立ち上がった村紗の動きよりも先に、

響子はきた道をぱたぱたと音を立てながら戻って行った。

遠くで再び叫んでいる響子の声が、村紗とぬえの部屋まで微かに響いている。

「廊下は走ってはいけないと、あれほど言っているのに…」

「そつちなんだ」

残された部屋の中、的外れな村紗の言葉にぬえは笑いを漏らす。村紗は「まったく」と独り言のように口の中で小さく呟きながらショートパンツの裾を身なりを整えるように払った。

「じゃあ、私はまた仕事に戻るから」

「えー」

「えーじゃないの。私はすることがあるんだから。ぬえは、どうするの？」

不満そうに唇を尖らせたぬえに村紗は問いかける。

嫌だいやだと子どものように畳の上を転がり始めたぬえはその言葉にぴたりと体の動きを止めると、口元だけで笑った。

「今日のお祝いのご飯を楽しみに待ってる」

「お祝いね」

「なんて言ったって、今日は記念日だからね」

外にでようとぬえの側を横切ろうとした村紗の服の裾をひっぱる。

少しだけよろけた村紗の瞳がぬえの瞳とぶつかった。

いつもの、悪戯を思いつたかのような子どもの瞳の色をした、ぬえの瞳と。

「ムラサと私が両思いになった日」

「…」

小さく、小さく、ばか、と呟いた村紗の声は、

外から吹き込んだ気持ちのいい風の流れに乗って

誰の元へも届かぬまま消えていった。

不安定な海の上

「これが何か分かる？」

船は穏やかな波の中でぶかりぶかり前へと進んでいる。向かう先は分からない。ただ、風と波の向かうまま。東の空から上った太陽は南を通り、もうすぐ西へ沈むだろう。船の甲板、白いテーブルに紅茶のポット、椅子は無く、絶え間なく揺れる足元、羽を煽る海風と、海鳥の鳴き声。二人はそんな不安定な場所に、存在していた。

手にしたものを軽々と上げて見せて、謎かけ遊び。遊びよりも、ずっと複雑な心情が潮のにおいを紛らわす。潮で固まってしまった髪の毛を、ムラサは指先に巻きつけながら、青の瞳だけはじっと、彼女の手の中を見つめた。分かる筈が無いと、知っていても、それでも。

「底の抜けたひしゃくに見えるわ」

「外れ。紅茶のカップよ」

テーブルからポットを持ち上げて、注ぐ。きちんと底のあるカップからは、茶色の液体はこぼれ得ない。湯気の立ち上る、それはムラサにはひしゃくにしか見えないのに、彼女は赤い唇にそれを近づけて、紅茶を飲んでみせる。感覚なんて共有できないのだ、と当て付けるように眉毛をゆがめて。潮風と、湯気で潤んだ赤い瞳が、こちらをじとり、視線で刺す。その瞳が、肺を埋めて呼吸を奪う、溺れる水のように、ずつとずつと嫌いだ。海の水は体を飲み込んで、抱き締めたいのに、伸ばした腕を絡め取る。

「ムラサ、あんたが見てるものなんて、結局は」

言葉を絞るように落として、彼女はふいっとそっぽを向く。穏やかな風に、海鳥が舞い上がる。ポットと、どう見てもひしゃくにしか見えないカップをテーブルにおいて、よろよると甲板の先へ。ざらついた手すりに手を掛ける、その羽がばたついている。赤く沈んでいく太陽に、染められた肌。風が浚いそうになった帽子を、ぎゅつと押さえる。彼女の背は、いつだって、押さえていないと帽子みたく風に盗られてしまいそうで、怖い。隣にそつと駆け寄って、同じ手すりにもたれかかる。彼女が握った手すりは塗装が剥げて、ささくれが指に痛く、冷えた鉄が爪まで冷やした。

「たとえば今日の前に見てる私だって、本当の正体は分からないのよ」

そっぽを向いたまま、彼女は言う。顔は猿、体は虎、しっぽはへびで、なんて彼女の風聞を知っていても、ムラサは愛らしい少女の姿が、彼女の本当なのだと思っていた。

「私には可愛い女の子に見えるわ」

背中から、黒い髪に、そつと触れてみる。自分の色とはまた違う、赤の入った黒髪。潮風に固まったそれを、そつと持ち上げて、口付ける。彼女はひくり、肩を震わせたけれど、なされるがまま、黙っている。鳥の羽音と、鳴き声、海鳴りだけが耳を突く。揺れる羽は左右で違って、どうやって飛ぶのかなんてムラサには分からないけれど、毒々しい色に触れた指先には、滑らかな肌触り、とても彼女らしい羽である。夕暮れの空の眩しさに目をしかめ、腰に手をやって、彼女を振り向かせる。案の定寂しげに潤ませている瞳にも、キスをした。海鳥が、高く、鳴く。咄嗟に、身を退いて、彼女は言う、

見えているものだけが真実とは限らないのよ。ムラサは手の甲に小さな冷たさを感じる、飛んだのは、波しぶきか、あるいは。舐めてみる、その味はどちらにしてもしょっぱい。

「私の信じることだけが、真実なの」

手の甲に落ちた雫は海水のしぶきで、目の前の彼女は可愛らしい女の子、ムラサはそう信じている、信じることに、決めた。沈みかけた太陽に照らされた海は、赤い。まっすぐに、青色の瞳と、赤色の瞳が見つめあう。波と同調して、定まらない視線。外したのは、やはり彼女からだった。

「それは、聖に言われたの？」

一瞬の間、がたん、船が揺れる。ムラサの動揺は、海に、船に現れてしまう。違う、否定の言葉よりも強い表象。見えないものも、見えるものも、真実は残酷だ。

「ぬえ、私は」

「ムラサ」

開きかけた口を、止められる。彼女の揺れる瞳の奥深くに、絶対に埋められない寂しさがあった。信じたくなかったって、自明的な、信じざるを得ない寂しさに、ムラサは抱き締められた。温かな体の、冷えた芯を感じながら、ムラサは瞳を閉じる。視界を奪ったって、心に浮かぶのは可憐な少女の姿であった。それが、真実。

船は穏やかな波の中でぶかりぶかり前へと進んでいる。向かう先は分からない。ただ、風と波の向かうまま。東の空から上った太陽は、

南を通り、もう西へ沈んでしまった。船の甲板、白いテーブルに紅茶のポット、椅子は無く、絶え間なく揺れる足元、羽を煽る海風と、海鳥の鳴き声。二人はそんな、不安定な場所に、二人ぼっちで、存在していた。

キャプテンが彼女のアンカーな話

「ぬえー、少しは準備手伝ってよ」

「いやだ、めんどい」

「そう言わずにさー」

部屋で寝っ転がりながら漫画を読む私をムラサは服の裾を引っ張り嘆願する。

いつものセーラー服の上にかもめ柄のエプロンをつけた姿は新鮮でちよつとどころでなく可愛い。

そのせいか、いつになくからかいたくなってしまふ。

「頼むよー、一人で料理つくるのはつらいんだよー」

若干涙目になりながら言う彼女の姿はなんか、こう、苛めたくなる。ああもう、なんでこんなに可愛いのか？ エプロンのせいかムラサだから？

「聞ってるのー？ 手伝ってよう」

は、いかにいかに、見惚れてしまった。

私は誤魔化すように咳払いをする。

「だいたいなんで今日にパーティするのさ。クリスマスは昨日でしょ？」

「それは聖発案よ」

「ふうん？」

「『仮にも毘沙門天様を信仰してる身では大っぴらにクリスマスを祝うわけにはいきません。けど、次の日ならただの宴会になります

ね』って」

「はぁん……」

さすが破戒僧を言うべきか。トンチが聞いている。

まあ、毘沙門天もそんなことをいちいち気にするとは思わないが。

「で、私が食事担当になったんだけど……結構大変なのよ。だから手伝ってください」

もう恥も外聞もなく思い切り頭をさげるムラサ。

ああ駄目。苛めたくてしょうがない。

「んー、どうしよっかなー」

「お願い！ 本当にお願ひ！」

わざとらしく悩む仕草を見せると、ムラサは必死に哀願してくる。

この時点で手伝ってやる気にはなっていたのだけど、折角の機会だ。もうちよっといじめてやろう。

「タダじゃ嫌だなー、何か欲しいなー」

「うー……大きめのケーキを食べる権利は？」

「まあ、悪くはないわね」

「そ、それと！ 今日、私が一緒に寝てあげるのはどう！」

Y e e e e e s !

じゃないじゃなくて。それはまずい。

即答しそうになったが、翼を脚に突き刺すことで押しとどめる。

しかし、なんてことを言うのかこいつは。

涙に潤んだ目でそんな事言われたら自爆以外ならなんでもきいてや

らあ。

「そそそそそうね。ムラサが可愛いじゃなくて可哀想だからソレくらいで手を売ってあげないことも無きにもしもあらずよ」

よし大丈夫。なんとかごまかせた。

「本当！ ああ、助かった……ありがとうぬえ」
「ま、まあたまにはね」

こっちの事情を何も知らない無垢な笑顔を向けるムラサが眩しすぎて私はそっぽを向く。
頬が熱いのは関係ない。ないったらない。

「けどさ、なんで私なの？ 他の奴らでもよかったじゃない」
「んー？ そりゃあ、ぬえと一緒によかったから」

あっけらかんと応えるムラサ。
あまりにあっさりと応えるものだから理解が遅れて、理解したときには顔を枕に埋めていた。

「どうしたの、ぬえ？」
「うっさいハゲ」
「おおう、素直に傷つくわそれ」

うるさいうるさい。
本当に何なんだコイツは。どうしてそんな恥ずかしいことを素面で言えるんだ。

「あ、そうだ。先に渡しとくね」

「……なに？」

枕を抱いたまま起き上がり、差し出された物を受け取る。

照明を受けて銀色を反射させるそれは錨のキーチェーンだった。大きさを割に重く本物の銀なのだろうか。

「クリスマスプレゼント。酔わないうちに渡したかったから」

「へ、へえ……あ、ありがとう」

何分プレゼントなんてもらった経験はないせいで、気の利いた返しも出来ない。

私もなにか用意しておけばよかったかな。

「けど、錨か……ムラサらしいね」

「それは願いも込められてるんだよ」

「願い？」

「そう、ぬえが何処にもいかないように。気がついたらいなくなってるんだもの。ちゃんと繋ぎ止めてられるようにね」

ちょっと気障だったかな。

ムラサは照れくさそうに頬を掻く。

そんな反応をしないで欲しい。こっちまで恥ずかしくなる。

だけど、それ以上に嬉しくて頬がゆるむ。

だって、ムラサも側にいて欲しいって思ってるってことだから。だめだだめだ。こんな顔は見られたくない。

私は再び枕に顔を埋めた。

「……これじゃ小さすぎるよ」

ムラサが気障ったらしいことを言うせいで。私も彼女を喜ばせたく
なった。

「あはは……私じゃソレが限界だったんだ……」

そうじゃない。そういう事を言ってるんじゃない。

これから言おうとすることはかなり気障で恥ずかしい。
これも全部ムラサのがうつったんだ。ムラサの馬鹿。

私は真つ赤であろう顔をあげ、八つ当たりの感情のままにムラサの
手を握る。

冷たいのに、嫌な感じはしない、安心する手。

「私の錨はもつと大きくて……馬鹿でにぶちんで脳天気で……」

頭の底まで熱くて苦しい。体中から汗も吹出して息もうまくできな
い。

しほり出すように熱い吐息と一緒に言葉を吐き出す。

「だけど……優しくて……かつこ良くて……いい奴だから」

だから、ちゃんと繋いでいて。

強く、絡めるように手を握りしめた。

ああやだよだ。

もうこんなこと二度と言わない。こんなこと素面で言えるなんてや
っぱりおかしいよ。

ムラサのバーカバーカ。

顔を逸らしたいけど、じつとムラサが見つめるから逸らせない。
なんか悔しかったので睨みつけてやる。
そしたら、難しい顔をしていた彼女はふっと表情を緩ませ微笑んだ。

「……ん、わかった。ちゃんと繋いでおくよ」

流石のにぶちんでも意味がわかったのか、頬を赤く染め手を握り返してくる。
冷たくてやさしいムラサの手に包まれて、胸の中からぽかぽかになる。

これなら暖房なんていらさないや。

「ふふっ」

「えへへ……」

赤面した顔を合わせると、おかしくもないのに笑ってしまう。
どうしてだろう。ただ手を握ってるだけなのにすごく幸せだ。

ずっとずっと、これからも。彼女に触れていたい。

「それじゃあ、手伝いよろしくね」

「うん！」

しっかりと私は握り返す。

何処にもいかないように、離れたりしないように。
私を繋ぎ止めるのは大好きな彼女。

「……その、食事中ははなしてくれない?」
「やだー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8030y/>

東方稲子神

2011年12月18日01時50分発行